茨木市郡遺跡発掘調査概報

― 上穂積・畑田地区 ―

昭和５３年３月

茨木市教育委員会

はしがき

茨木市には、郡遺跡の他数多くの遺跡が存在しております。

郡遺跡もそのひとつで、昭和29年夏に児童遊園地造成の際に郡神社南側の丘陵で弥生時代の土器の破片が見つかり、その10年後に名神高速道路及び同茨木インターチェンジが出来ることになり調査した結果弥生時代の土器等が見つかり、遺跡の存在が決定的なものとなりました。

今回の概報は、昭和48年6月～8月にかけて発掘調査を行った茨木市立西幼稚園（上穂積）。同52年6月～8月にかけて発掘調査を行った茨木市立畑田小学校（畑田）の成果をまとめたものであります。

本書が古代の人々の生活を知る上で少しでも役にたつことを願い、これからも貴重な文化財の保存保護に全力を尽くす所存でありますので、今後ともよろしく御理解・御協力をお願い致します。

最後に、地元の人々をはじめ、多くの調査関係者の助力をうけましたことをここに記して感謝の意を表します。

茨木市教育委員会

教育長　小野　耕五郎

例　　言

1. 本概報は、茨木市教育委員会が公共事業の一環として、本市教育委員会社会教育課と同施設課の協議のもとに発掘調査を行い、その概要をまとめたものである。

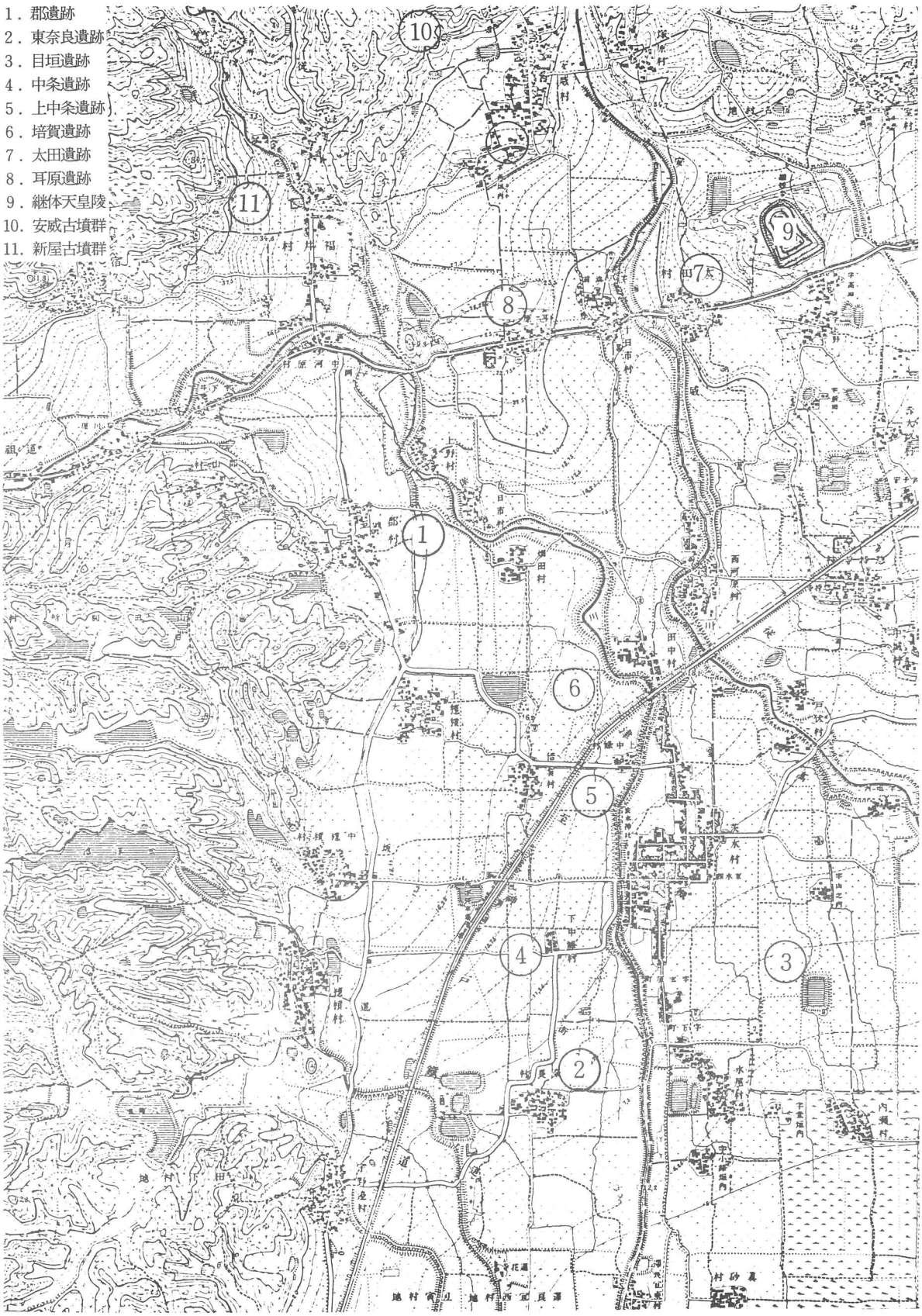
2. 調査には、茨木市教育委員会社会教育課文化財係奥井哲秀を担当者として昭和48年6月～8月（市立西幼稚園）、昭和52年6月～8月（市立第24小学校・仮称）にかけて行ったものである。

3. 調査にあたっては、昭和48年夏は主に近畿大学考古学研究会のメンバーの他、諸学生の協力を得、昭和52年夏は、白井忠雄氏の他近畿大学考古学研究会のメンバーと東奈良遺跡調査会のメンバーの協力を得ましたことを厚く感謝いたします。

4. 概報作成にあたっては、白井忠雄・大野恵三子・東奈良遺跡調査会のメンバー諸氏より援助と助言を受けましたこと厚く感謝いたします。

5. 本文の執筆は奥井哲秀・白井忠雄が行い遺物については大野恵三子が行った。

1．郡遺跡
2．東奈良遺跡
3．目垣遺跡
4．中条遺跡
5．上中条遺跡
6．培賀遺跡
7．太田遺跡
8．耳原遺跡
9．継体天皇陵
10．安威古墳群
11．新屋古墳群



第1章　遺跡の位置と環境

茨木市は、大阪府の北東部三島平野を形成する一部であり、昔から京都・大阪を結ぶ交通の要路で地域的にも重要な位置を占めており、中国山地から連なる丹波山地と大阪平野が接するところに位置する。

本市の地形は南北に細ながく北部は山・丘陵地帯で京都府と境をひき、南部は淀川に面した平野部となる。さらに安威川・佐保川・勝尾寺川が北部の山間部から南部の平野部を縦断し、近江・山城・大和から源を発する大河川淀川と連らなり大阪湾にそそいでいます。

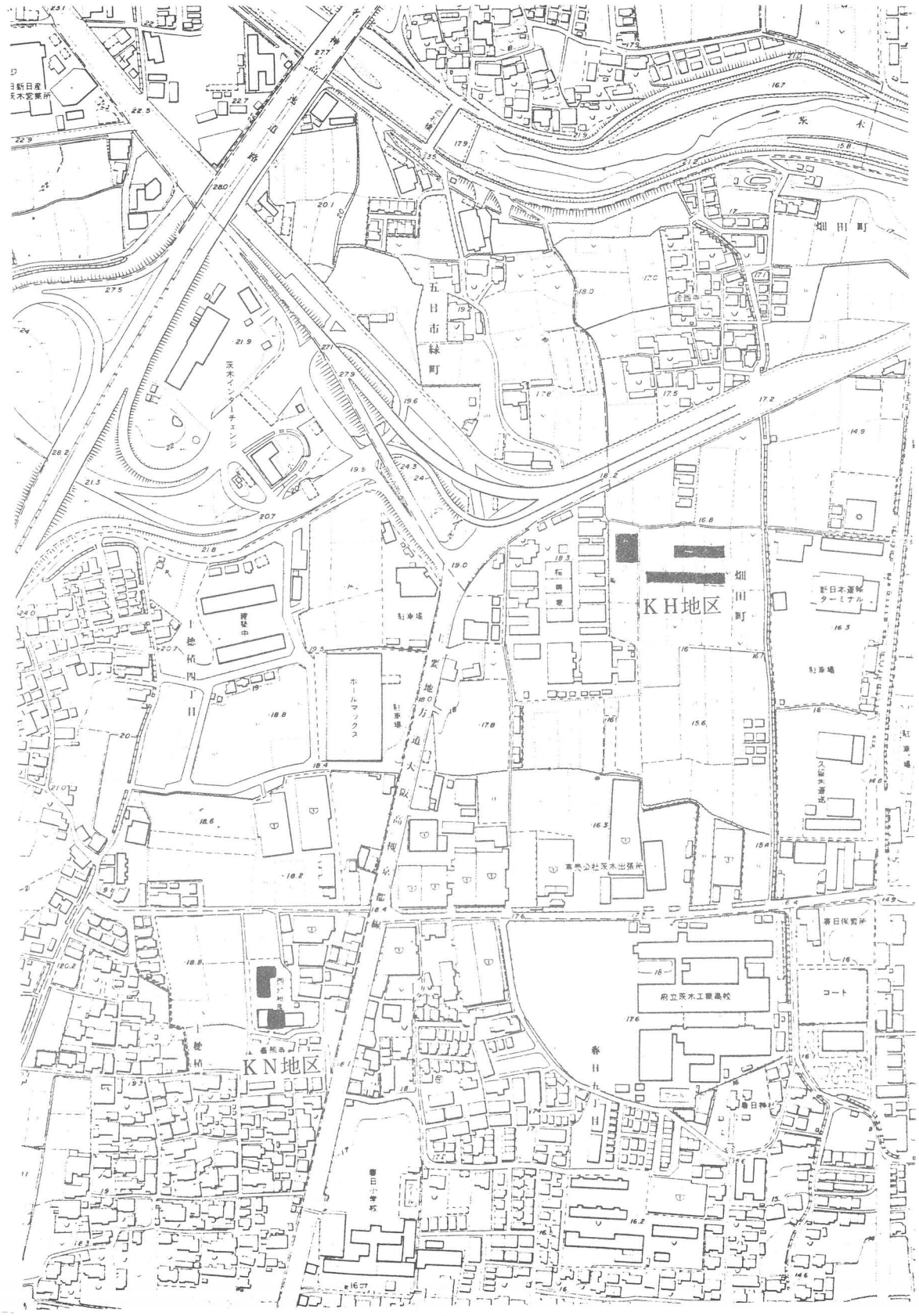
これらの河川は茨木の歴史発展に非常に重要な役割を果たしており、なかでも安威川は、その源を丹波高原に発し、車作の上流で音羽川と合し、さらに野々宮の地で玉川と合し、西流して神崎川にそそぐ。この間に両岸の村々は川水によってしばしば灌漑するところが多く、そのため中流にはいくつかの堰が設けられ水路を掘って川の水をひいていた。しかしこれらの水をひき得るか否かで死活問題ともなり、古来から井堰をめぐっての水論がまき起こされていたのである。

本市には、北部の山間地帯や南部の平野部にも数多くの遺跡がみうけられ、最も古い時期のものとして無土器時代の石器の発見が山間部の佐保川上流の庄ノ本・免山辺りから見られるらしく、また平野部での遺跡から若干発見されている。しかし縄文時代の遺跡は少なく、断片的な遺物が発見された初田遺跡のみであるが市域のどこかには縄文時代の遺跡があるとみられる。次の弥生時代になると農耕生活となり全国でも遺跡の数が多くなるが、この地にも遺跡の数が急激に増大し、代表的な東奈良遺跡の他、耳原・五日市・安威・太田・中条・上中条・溝咋・目垣などがあり、なかでも東奈良遺跡は弥生時代前期から古墳・歴史時代と続き、遺跡の大きさ、出土遺物の多量・多様さは全国的にもあまり例をみず、とくに昭和48年から翌年にかけての銅鐸の鋳型等の出土は目をみはるものである。この時代の遺跡のほとんどは標高7mから15mまでの低地に多く見られる。さらに古墳時代になると東奈良遺跡のように集落が古墳

時代以降も続くものを別として、一般的に古墳と呼ばれる封土をもったものには、古墳時代前期の紫金山古墳・将軍山古墳があり、中期には三島藍野陵（継体天皇陵）といった台地山に巨大な前方後円墳があり、後期になると、南塚・耳原・海北塚・青松古墳といった横穴式石室をもったもの、また安威古墳群・新屋古墳群・郡古墳群といった群集墳があり、隣接する高槻市の多数の古墳とともに北摂津の一大古墳群が存在している。しかし、「大化の薄葬令」施行以後、古墳の築造は減り、わずかに初田１号墳・上寺山古墳（火葬墓）のみである。

こうした環境の中に存在する郡遺跡は、現在の茨木市郡・上穂積・春日・畑田地域一帯に広がり、今までに確認された範囲では、南北約６００ｍ・東西約７００ｍの大きな弥生時代から古墳時代・歴史時代へと続く複合遺跡であったと思われる。

周辺の地形は北部を老ノ坂山地、西部は標高８０ｍ前後の低い千里丘陵がのび、東約５００ｍに安威川と勝尾寺川が合流して１本の安威川となり、南部は平野部に市街地が広がっている名神茨木インターチェンジの周辺で標高約１０ｍ前後に位置する。こうした地形は、水にめぐまれて農耕生活を営むにもよく、また漁業にも適しており一歩北部の山に入れば獣類の捕獲もできる。したがって人々は比較的安定した生活を営み、除々に定住していくのであろう。


KH地区
KN地区
五日市緑町
畑田町
茨木インターチェンジ
ホールマックス
大阪高槻線
府立茨木工業高校
春日小学校
春日神社
新日本運輸ターミナル
入谷木材店
茨木公社茨木出張所
新日本興業茨木営業所
茨木

第2章　調　査　経　過

郡遺跡は、昭和29年の夏、郡神社南側の丘陵を切り開いて地元の人達の総出で児童公園を造る事になりその時に掘りおこされた土の中から弥生式土器の破片が見つかったのが最初であり、その10年後日本道路公団による名神高速道路が通ることになり、それとともに名神茨木インターチェンジが併設される際に試掘調査を同志社大学の応援を得て2ケ所調査されたところ現地下75㎝の処から弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）の土器や須恵器が出土し、さらにインターチェンジのすぐ南を昭和48年から翌年にかけて約20,000㎡の範囲を発掘調査されたところでは、弥生式土器・土師器・須恵器等が多量に出土しさらに石器や馬の歯なども出土している。また遺構も弥生時代の住居・井戸・方形周溝墓・古墳時代の溝・墓なども数多く検出されており、弥生時代から古墳時代・歴史時代へと長く続いたかなり大きな遺跡であることがわかってきたのである。

今回の概報に記すものは、上記の調査と同様に昭和48年夏に発掘調査を行ったものである。同年に郡遺跡の範囲とみられる上穂積に市教委が市立西幼稚園を建設することになり、それに先だって発掘調査を行うことになった。調査の範囲は、園舎とグランドの計約540㎡の広さであり、約2ケ月の予定で大学生や高校生の協力を得て行った。また昭和52年に畑田に市教委が市立第24小学校（仮称）を建設することになったが、この地は郡遺跡の中心とみられる処からは東へ離れるところから同年5月に予定地の全域にわたって10ケ所の試掘を行ったところ地下約50㎝の処から茶褐色の粘土層（包含層）があり古墳時代の須恵器等の破片が出土したことから郡遺跡の範囲がここまで広がることがわかり工事に先だって、校舎2つと体育館の予定地の発掘調査を同年6月から8月にかけて行った。

今回の概報は、上記2ケ所の発掘調査の結果をまとめたものである。

第3章　調査結果（市立西幼稚園）

1. 調査日誌

6月20日

発掘調査開始、まず調査範囲の確認と、10m四方に地区の割り付けを行う。

6月21日

地区割り付けの続きと、男2人、女3人の調査補助員で茶褐色粘質土層（包含層）の除去作業を行う。

6月22日

この日から7月9日まで包含層の除去作業を続ける。その間、7日間は休日のほか雨のため作業を中止した。弥生式土器の他須恵器の破片を少量ながら検出されてきた。

7月10日

柱穴（ピット）を数個検出。縦・横に並ぶ可能性があり全員で検討するが、結果はでずじまい。さらにだ円形の堀り込みを検出する。

7月11日

残っていた包含層除去作業も本日でほぼ終り、全員で遺構の検出および遺構掘りに入る。

7月13日

単なる溝と思われていたのが上から見ると四方に囲るため方形周溝墓の可能性があることがわかる。

7月20日

夏休みとなった地元高校生の応援で作業を進めるが、しばらく雨が降らないため地山まで下げた面は地割れがひどく作業が困難である。

7月22日

方形固溝墓の溝堀りや、ピット・土拡の遺構掘りを行う。方形周溝墓の北溝より弥生式土器が出土。

7月30日

日照りが続き暑い中ほとんどの人がバテぎみである。バケツリレーをしながら遺構面に水をまきながらの調査を続ける。

8月　1日

方形周溝墓を完掘する。溝から出土した遺物から弥生時代中期のものであることがわかった。実測及び他の遺構掘りを行う。

8月　8日

雨の降らない日が続き、ついに市民プールの開放が無期延期となり、そのアルバイトの人達が調査の応援にきてくれる。

8月13日

この日から盆休みとなり、人数が少し減るが調査を続行する。

8月18日

数多くの土拡を検出する。また堀立柱の住居址1基確認する。

8月19日

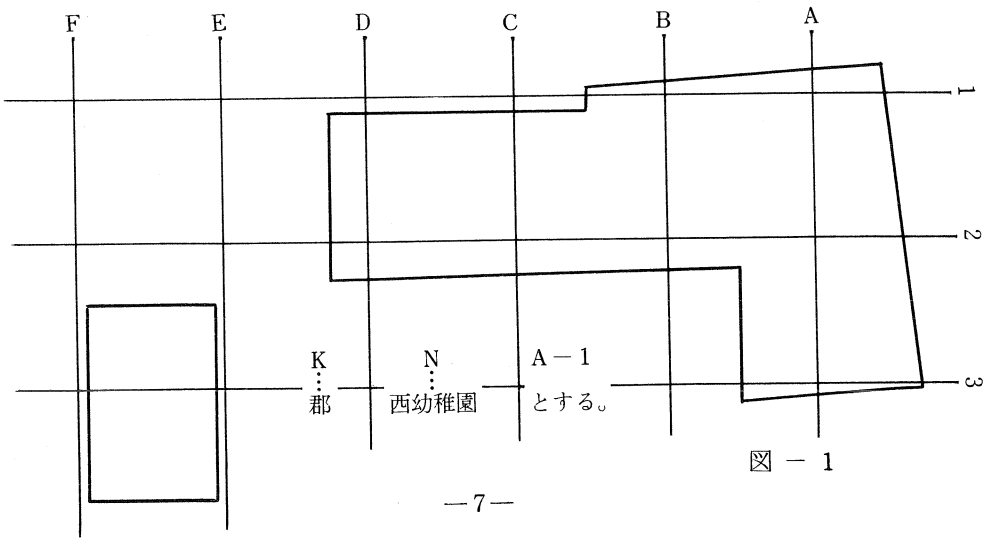
全域の実測及びレベルの測量を行う。

8月22日

すべての調査が完了する。

2. 割り付け

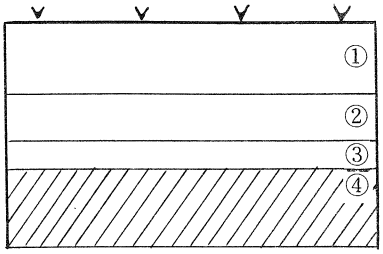
下図のように北から南にかけてアルファベット、西から東へ算用数字で表わしその間隔を各10mとし、各基点を東南角とする。



図－1

3. 層　　位

図－2



① 耕　　土

② 床　　土

③ 茶褐色粘質土層（包含層）

④ 地山（生活面）

上図の図－2は層の幅、① 20㎝ ② 10㎝ ③の層は場所によってないところもあるが平均5～6㎝であり非常に浅いところから地山（生活面）が確認されている。③層より弥生式土器や須恵器の破片などが出土しているが、後世にかなり削りとられている可能性が強い。

4. 検出遺構および遺物

a. 方形周溝墓

KNF－3・4地区で1基検出した。（図版－12）。この方形周溝墓は周囲四方とも完全に溝で囲まれており、規模は、南北8m・東西12mの長方形のものであり、西溝と東溝が幅約1.2m、北溝と南溝が幅約0.6mであり、深さは若干のちがいはあるが四方とも約30～40㎝のものである。さらに内側の台状部には主体部（被葬者）と考えられるものは検出できなかった。これら溝の深さなどと考え合わせるとすでに大部分が削平されていたことになり主体部は検出できなかったものと考える。しかし台状部では多数の柱穴（ピット）と2基の土壙を検出した。方形周溝墓の時期は、北溝内と南溝内の底から少し上で（図版15の1）弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式）の壺が各1点ずつほぼ完形で横に倒したような状態で出土しており、この被葬者のための供献土器と考えられるところから若干の前後はあるがこの時期と考える。

郡遺跡では、これまでにも10数基の弥生時代中期の方形周溝墓が確認されており、この地区のものもその連続性あるいは関係が深いものと思われる。したがって墓域の広がりはさらに南へのびることも考えられ、また

集落も今後の調査によっては広がるとも考えられる。

b．土　壙　墓

方形周溝墓の内側台状部には土壙－1・土壙－2（図版－12）の2基の土壙が検出されたが土壙－2は墓としては成り立たない可能性が強い。土壙－1は方形周溝墓の主被葬者と何らかの血縁関係をもつものと考える。

規模 / No.	長さ×幅(cm)	平均の深さ(cm)	主軸
1	1.7×0.7	20～23	E•W
2	1.0×0.7	20～22	〃
3	1.7×0.9	21～26	〃
4	2.1×1.1	18～20	S•N
5	1.6×0.8	20～22	〃

表－1

また周溝外あるいは溝が埋もれてしまったあとで造られた土壙墓が、土壙－3・4・5の3基検出されているが5基とも時期が決定的となる遺物の出土をほとんどみないため不明である。規模については表－1を参照。

c．土　壙　群

前述の方形周溝墓より北側にこの一群が存在する。（図版－12）これらの土壙群の中には墓としての性格をもつものと全く違ったものも含まれているので一応土壙と称す。これらの土壙はそのほとんどが主軸を東西にとっている。方形周溝墓とは違った墓の形体ではあるが何らかの形で関係があると思われる。

各土壙からの出土遺物は少なく、弥生式土器・土師器・須恵器など各時期にわたっておりはっきりと時期決定できるものはないが、畿内第Ⅱ様式後半のものは出土をみないので、方形周溝墓より若干新しい時期と考えるがそれほどの大差はない。規模については表－2を参照。

d．堀立柱住居址

KNC－1・2の地区にまたがっているが、主軸を南北におき、南北に3間のピットが並び、東西に2間のピットが並ぶであろうが東西には並ぶピットは2個しかないため中央の1個は削平されたか、もともと浅かったのか、また初めからなかったのかは不明である。またその時期に関してもピットからの出土遺物がないため不明である。

No.	長さ×幅 (cm)	平均深さ(cm)	主　軸
1	170×110	15～ 6	E・W
2	250×150	20 前後	〃
3	340× 90	15 前後	〃
4	250× 90	12～ 3	〃
5	260×100	25～ 6	〃
6	250×130	40～ 4	〃
7	70× 80	15～ 6	ピット
9	200×100	9～10	〃
10	160×100	18～20	S・N
11	150× 80	15～ 6	〃
13	210×110	9～11	E・W
17	150× 70	16～ 7	〃
18	280×120	23～ 5	〃
20	220× 80	12～ 3	〃
22	160×130	15～ 6	ピット
23	160× 70	14～ 5	S・N
27	230× 70	20～ 1	E・W
28	160× 70	15～ 6	〃
29	180× 90	12～ 3	〃
30	220× 90	7～ 9	〃
31	220× 80	12～ 3	〃
32	200× 80	9～11	〃
33	160×100	15～ 6	〃
34	170× 90	14～ 5	〃
35	130×100	35～ 6	〃
36	190×100	20～ 1	〃
37	150×100	38～ 9	〃
39	180× 50	20～ 1	〃

表 － 2

調査結果（市立第２４小学校）

1. 調 査 日 誌

昭和５２年６月８日

校舎及び体育館の建地範囲を確認し現地で杭を配す。挿図－６の様に調査地区をＡ・Ｂ・Ｃ地区とし全体を９㎡に割り付をし順次番号を付けた。

６月　９日

Ａ地区南西部より本格調査を開始する。層位は、地表より２０㎝が耕土それより下20㎝が床土で、床土を外すと茶褐色粘質土層（包含層）に当る。この結果により、順次包含層の上面まで機械による第一次削平を開始した。

６月１３日

Ｃ地区もＡ地区と同じく第一次削平を開始する。併行して全体の５００分の１で平板測量を実施した。

６月２０日

Ａ地区は包含層の除去も一応終り、Ｃ地区の包含層の除去を始める。

６月２１日

Ｃ地区も一応包含層の除去を終り、Ｂ地区の包含層の除去を始める。Ｂ地区は、思っていたより出土遺物が多い。

６月２３～２５日

雨が降り続くが、作業は休まずテントを張ってみんな元気に続ける。しかし、雨の為一輪車が思う様に動かず、調査は難行する。

６月２６日

Ｂ地区包含層除去を一応終る。

６月２７日

Ｂ地区西部より遺構の発掘を開始する。

７月　７日

Ｂ地区の遺構の発掘は井戸－１と井戸－２を残し一応終え、Ｃ地区へと移る。

7月13日

B地区の井戸－1・井戸－2の遺構発掘調査を終え写真撮影を行う。

7月14日

B地区の全体写真撮影を行う。16日の郡（畑田）遺跡見学会の写真を撮る為に新聞社が現場に来訪。

7月16日

郡（畑田）遺跡見学会　午後1時より行う。多くの見学者が現場に来訪。A地区の遺構発掘を始める。

7月21日

A地区とC地区の遺構発掘を一応終える。

7月25日

B地区の実測開始。

7月29日

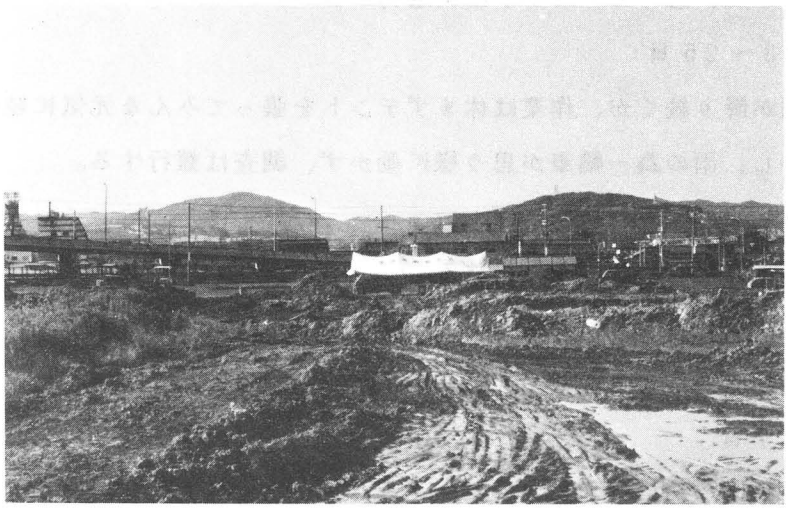
C地区の全体写真撮影と実測開始。

8月　1日

A地区の全体写真撮影と実測開始

8月12日

A・B・C地区の実測を完了し郡（畑田）遺跡の発掘調査を完了する。



図－3　郡（畑田）遺跡全景　南から

2. 内業調査

内業調査は、奥井哲秀を中心に、ＫＨ地区の遺構を白井忠雄－ＫＮ・ＫＨ地区の出土遺物を大野恵三子が行った。なお遺構に関しては松岡良憲・石田治雄両氏の援助を受けた。

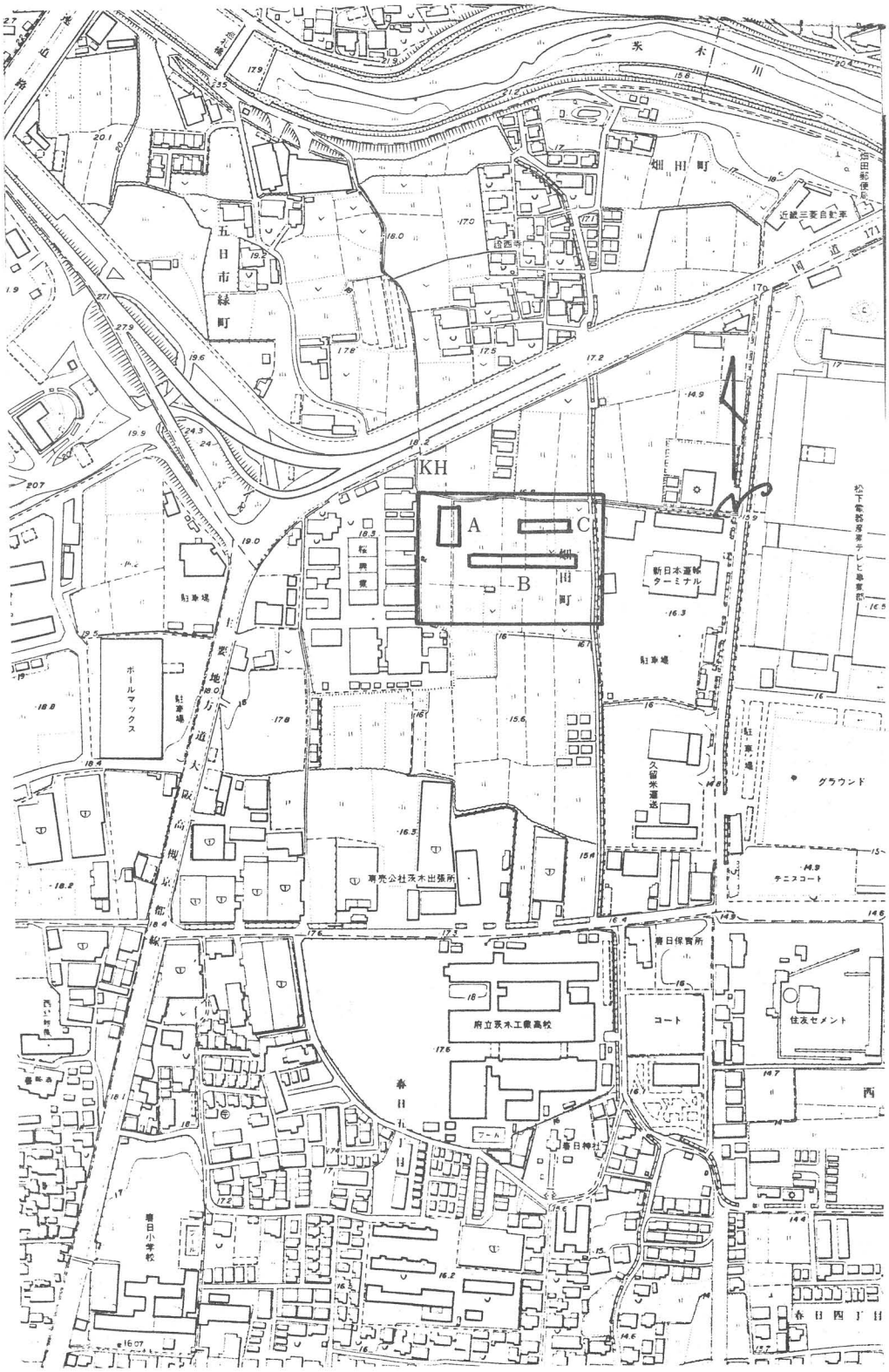
遺物に関して、出土量が尨大で、又時間的制約があり全てを観察出来なかったので、今後修正を加えなければならないだろうと考えられる。

3. 割り付け

割り付けは、図－４の様に北西角から東と南へ９ｍづつの割り付を行い、順次１番から番号を付ける。

図－４　ＫＨ　Ａ・Ｂ・Ｃ地区割り付図

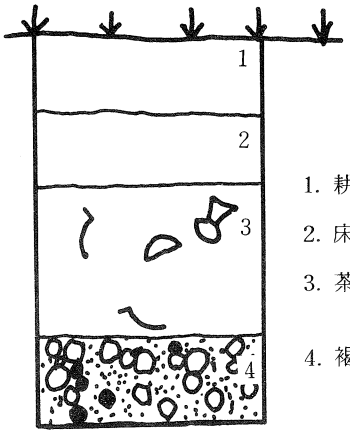
1	24	25	48	49	72	73	96	97	120	121	144	145	168	169
2	23	26	47	50	71	74	95	98	119	122	143	146	167	170
3	22	27	46	51	70	75	94	99	118	123	142	147	166	171
4	21	28	45	52	69	76	93	100	117	124	141	148	165	172
5	20	29	44	53	68	77	92	101	116	125	140	149	164	173
6	19	30	43	54	67	78	91	102	115	126	139	150	163	174
7	18	31	42	55	66	79	90	103	114	127	138	151	162	175
8	17	32	41	56	65	80	89	104	113	128	137	152	161	176
9	16	33	40	57	64	81	88	105	112	129	136	153	160	177
10	15	34	39	58	63	82	87	106	111	130	135	154	159	178
11	14	35	38	59	62	83	86	107	110	131	134	155	158	179
12	13	36	37	60	61	84	85	108	109	132	133	156	157	180



図－5　ＫＨ５０００分　１全体図

4. 遺構（ＫＨ－Ａ・Ｂ・Ｃ）

ＫＨ地区の土層図は、図－６の様になっており包含層には、弥生式土器・須恵器・土師器・中世の瓦器等の遺物を包含して全体的に須恵器が多い様である。包含層の厚さは、Ａ地区からＣ地区に移るにしたがってだんだん薄くなって行く様であり、この様な現象からＫＨ地区は郡遺跡全体から見れば、遺跡の東側に当る地区であろうと考えられる。ＫＨ地区の包含層は遺物に時期的な差が大きく観察されるゆえにこの層自体整地層であったのかもしれない。ゆえに遺構は全地区にわたり大きく削平を受けている。



1. 耕　土　20㎝
2. 床　土　20㎝
3. 茶褐粘質土層（包含層）　40㎝
4. 褐色レキ層（地山）

図－６　ＫＨ 層位図

ＫＨ－Ａ地区の遺構に関して（図版１・１３）

溝－１１、幅８２㎝、長さ１０ｍ８１㎝、深さ１１㎝のＵ字溝である。時期は弥生時代中期である。

溝－１０、幅５０㎝、長さ１８ｍ、深さ２５㎝のＵ字溝である。時期不明

土壙－１、長軸１ｍ７３㎝、短軸４０㎝、深さ５０㎝、出土遺物は２である。

方形周溝墓群－５、６、７、８、９　この方形周溝墓群は、５の西側にもう一基ある様で、築造の順序は、この５の西側から５→６→７→８→９と考えられる。築造に際しては、一溝づつ溝を共有して造られ５・６・７はブリッジが残っている。主体部は、後世の削平で不明である。この方形周溝墓群の特色は、６号までは一辺の長さが９ｍであるのに、７号以後は縮少の傾向を示している。溝の深さは、５－６０㎝、６－３０㎝、７－１０㎝、８－２４㎝、９－３２㎝である。時期は６が弥生時代中期である。

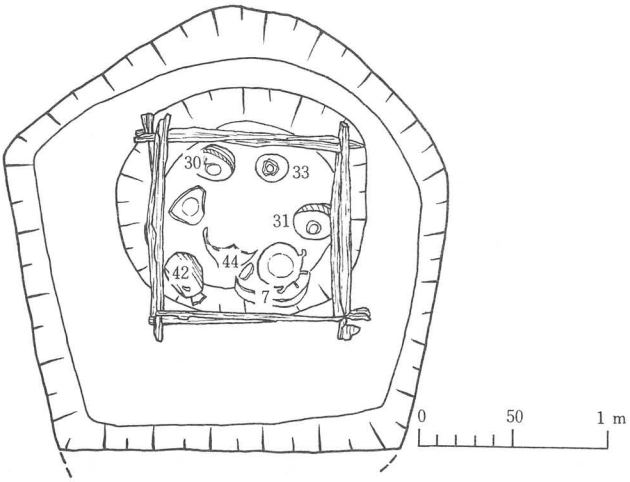
掘立柱建物址－１　４間（１ｍ４０㎝）×３間（１ｍ１０㎝）時期不明

ＫＨ－Ｂ地区の遺構に関して（図版２・３・４・１４）

溝－１　幅２ｍ７０㎝、長さ１０ｍ、深さ６０㎝のＵ字溝である。北に行くにしたがってだんだんと浅くなって行く。出土遺物は１８・２１・１２・１７である。

溝－２　削平がひどく痕跡しか見られなかった。

溝－９　幅６０㎝、長さ２９ｍ、深さ２１㎝のＵ字溝である。時期不明



図－７　ＫＨ Ｂ地区井戸－１　平面図

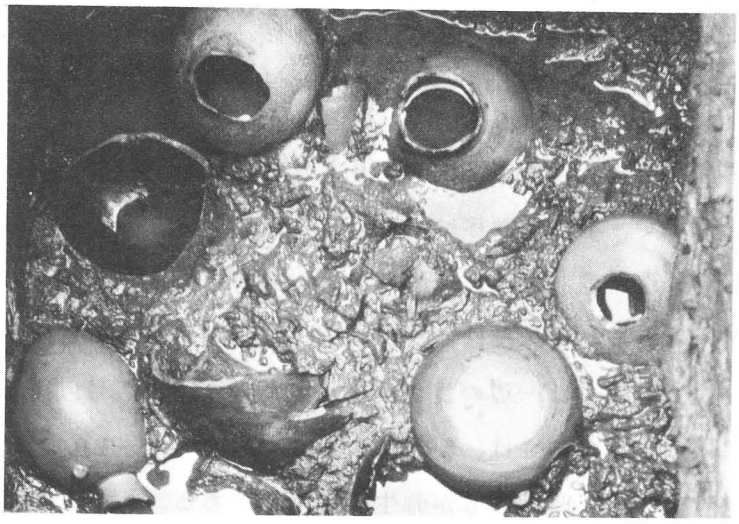


図　－　８　井戸－２　遺物出土状況

井戸－1　掘方上部は長軸2m30㎝、短軸1m80㎝下部は長軸2m、短軸1m60㎝深さ2mでそこに一辺長さ1m、幅50㎝、厚さ7㎝の板材を井に5段組んで井戸枠としその井戸枠内に図－7・8の様に土器を入れている。井戸枠の下層は井戸枠を据やすくするために円形(1m10㎝×1m30㎝×30㎝)窪めている。発掘中に発見した事であるが、北東の下層に誘水層があり今でも一日で水が上部30㎝の所まで湧いてくる。他の出土遺物は、上部1m(上層)の所に32が出土した。出土遺物は全て仮器となっている様である。

井戸－2　掘方上部は一辺1m90㎝の四角形で下部は直径1m25㎝の円形である。深さは上部(四角形)は2m30㎝、下部(円形)は30㎝である。出土遺物は上層で28・29　下層34・35・36である。

方形周溝墓　1・2・3・4　深さは1－32㎝、2－30㎝、3－60㎝、4－35㎝である。時期は4の弥生時代終末期以外は不明である。主体部も4の土壙以外は、削平されていて不明である。

KH－C地区の遺構に関して（図版5・6・14）

ピット群1・2　1も2も2間で北へのびる建物址であるようである。1は、1間が2mで深さ40㎝である。2は、1間が2m10㎝で深さ30㎝である。

住居址－1　5m×4m50㎝で4本柱の竪内住居址である。竪内の深さは12㎝でピットの深さは13㎝ある。時期は床面に6世紀前半と考えられる須恵器の杯蓋の破片があった。

井戸－3　一辺3m70㎝の四角形の掘方で深さ3mである。下部には、直形1mの円形の井戸枠を組んでいる。この井戸枠は3個に分解でき1個づつに枠穴があけられている。井戸枠自体は全体に痩せており正確な数置は不明である。この井戸枠を据る為に井戸枠の下30㎝窪め井戸枠の外側に3コ栗石で井戸枠を固定している。この井戸も2号同様今でも湧水がわいてくる。出土遺物は図－9と37と40である。

（白井 忠雄）

第4章　出　土　遺　物

1.　土器観察表①

弥生式土器

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
無頸壺	1	• 最大腹径は、胴中位にありやや胴長の器体を呈す。 • 口端部は、やや面をなし少し内面に肥厚する。 • 底部は、平底。	• 口縁部内外面ともナデにて仕上げる。 • 頸部には、3本と2本の原体で、櫛描き平行線が施されている。 • 胴部外面は、　磨き、内面は、ナデにて仕上げる。	
壺	2	• 胴長の器体を呈す。 • 底部は、やや突出した平底。	• 体部内外面ともナデ。 • 頸部に櫛描波状文を、肩部には、櫛描きによる文様が施されている。	• これより下記は、KH地区の出土遺物である • 乳褐色 • 胎土　1㎜内外の砂粒を含む。 • 焼成　良

土　師　器

杓子型製品	3	• 杓子形をしており、持ち手がやや斜めに付けられている。	• 全体的に手づくねで、指圧痕が顕著である。 • 持ち手の裏面には、2ケ所、竹簡文がついている。	• A－26包含層 • 乳褐色 • 胎土、細砂含む。 • 焼成　軟質
蓋	4	• 天井部に中凹みのつまみをもつ。 • 天井から口縁部へと、なだらかに屈曲し口端部は、丸くおさめられている。	• 天井部は、回転を利用したハケ目調整。 • 口縁部外面は、叩き目後細かいハケ目、内面は、ナデにて仕上げられている。	• B－126土器溜め • 淡黄褐色 • 胎土　良好 • 焼成　軟質 • 短頸壺の蓋か
鉢	5	• 短く外曲する口縁。 • 口縁部と体部との接合部外面、ややふくらむ。 • 丸底。	• 口縁部内面は、斜方向外面は、縦方向のハケ目調整後ナデ。 • 体部内面は、ナデ、外面は、縦方向のハケ目にて調整されている。 • 底部は、ナデでていねいに仕上げられている	• A－20一括遺物№2

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	6	• 短く外皮する口縁、端部は、小さく立ち上がり外面に稜をもつ。 • 最大腹径は、胴中位にあり、胴長の器体を呈す。	• 口縁部内外面とも斜方向のハケ目調整。 • 体部内面は、ナデにて平滑に仕上げている。 • 外面は、斜方向のハケ目調整。ススの付着著しい。	• B－67井戸－1 ⅙7 • 淡茶褐色 • 胎土　良好 • 焼成　良好
壺	7	• 内彎ぎみに上方へのびる口縁。 • 口縁部と体部の区画は、にぶくなだらかに偏平な体部へつづく。 • 底部は、平底。	• 内縁部内外面ともナデ調整 • 頸部内面は、横方向、外面は、斜方向の叩き目が行われている。 • 体部内面は、ナデ、外面は、上半のみ斜方向の叩き目、下半は、ナデ調整。 • 底部外面は、縦方向の叩き目が行なわれている。	• A－20包含層 • 淡黄褐色 • 胎土　良好 • 焼成　良好 • 内面の叩き目は、当板が平行なのか。
甕	8	• 短く外反する口縁、端部は、短かく立ち上がり、外側に狭い面をもちゆるい凹線一条施こす。 • 最大腹径は、胴中位にあり偏平な器体を呈す。 • 底部は、平底。	• 口縁部内外面ともナデ調整。 • 体部内外面とも斜方向の叩き目が行われている。 • 底部外面は、縦方向の叩き目が行なわれている。	• A－20一括遺物⅙1 • 淡黄褐色 • 胎土　良好 • 焼成　良好 • 内面の叩き目については、壺7と同じ。

須　恵　器

杯	杯A	9	• たちあがりは内傾し、端部内面にゆるい段をつくる。 • 受部は短く、先端は丸くつくる。	• 体、底部外面の3分の2強篦削りし、内面及び他は、横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる。 • 削りの方向は、時計まわり。	• B－139溝－8 • 淡青灰色 • 胎土　やや粗砂を含む。 • 焼成　良
	杯B	10	• たちあがりは短く内傾し、端部はやや尖りぎみである。 • 受部は短く、上面にゆるい凹線をもち、先端は丸くつくる。	• 体、底部外面の2分の1篦削りし、内面及び他は、横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる。 • 削りの方向は、時計まわり。	• B－139包含層 • 淡灰色 • 胎土　良好 • 焼成　良好

器形		土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	杯C	11	• たちあがりは短く内傾し、端部は丸味をもつ。 • 受部は短く、先端は丸くつくる。	• 体、底部外面の2分の1弱篦削りし、内面及び他は、横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる。 • 削りの方向は、逆時計まわり。	• B－139包含層 • 淡灰色 • 胎土　やや粗砂含む。 • 焼成　良好
蓋	蓋A	12・13	• 天井部は丸い。 • 天井部と口縁部とをわける稜は鈍い。 • 口縁部は、やや外開きで、端部は丸く内面にゆるい段をもつ。	• 天井部外面の3分の2篦削りし、内面は横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる。 • 削りの方向は、逆時計まわり。	• 12はB－54溝1 • 暗灰色 • 胎土　やや粗砂含む。 • 焼成　良好 • 13はB－150包含層 • 灰色 • 胎土　粗砂含 • 焼成　良好
	蓋B	14・15	• 天井部は丸くなだらかである。 • 天井部と口縁部の区画はない。 • 口縁部は、外開きで、端部は丸く内面にゆるい凹線をめぐらすもの（14）もある。	• 天井部外面の2分の1篦削りし、内面及び他は横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる（15） • 削りの方向は、時計まわり（14）と逆時計まわり（15）がある。	• 14はA－20一括遺物№1 • 淡灰色 • 胎土、焼成とも良好。 • 15はB－150包含層 • 淡灰褐色 • 胎土　良 • 焼成　不良
	蓋C	16	• 天井部はやや偏平である。 • 天井部と口縁部の区画はない。 • 口縁部はややいびつで、端部は丸くつくる。	• 天井部外面の2分の1弱篦削りし、内面及び他は横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる。 • 削りの方向は、逆時計まわり。	• B－139包含層 • 淡灰色 • 胎土　粗砂含む。 • 焼成　良
	短頸壺蓋	17	• 天井部は丸くなだらかである。 • 天井部と口縁部の区画はない。 • 口縁部は、やや外開きで端部内面にゆるい段をつくる。端部は丸くつくる。	• 天井部外面の2分の1強篦削りし、内面及び他は横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる。 • 削りの方向は、時計まわり。	• B－54溝1 • 淡灰色 • 胎土、焼成とも良好

器形		土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	高杯脚部	18	• 脚部はやや長く、脚端部はわずかな稜をもち段をなす。 • 長方形の透しを三方にあけている。	• 脚部内外面とも、横ナデ調整。	• B－54溝1 • 淡灰色、一部黝色を呈す。 • 胎土、焼成とも良好
		19	• 脚部は短く、脚端部はにぶい段をなし、少し内面に肥厚する。 • 三角形の透しを三方にあけている。	• 杯部は器壁が非常に薄い • 脚部内外面とも、横ナデ調整。	• B－102包含層 • 青灰色 • 胎土、焼成とも良好
	有蓋高杯	20	• 杯部、たちあがりは内傾し、端部内面に段をつくる。 • 受部は短く、先端は丸くつくる。 • 脚部は短く、脚端部は誇長されやや大きく丸い、にぶい凹線が一条めぐっている • 長方形の透しを三方にあけている。	• 体、底部外面の2分の1篦削りし、内面及び他は横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる。 • 削りの方向は、逆時計まわり。 • 脚部内外面とも横ナデ調整。	• B－54溝1東肩部 • 淡青灰色 • 胎土、焼成とも良好
		21	• 杯部、たちあがりは内傾し、端部内面ににぶい段をつくる。 • 受部は短く、先端は丸くつくる。 • 脚部は非常に短く、脚端部は、丸く凹線が一条めぐっている。 • 長方形の透しを三方にあけている。	• 体、底部外面の2分の1篦削りし、内面及び他は横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる。 • 削りの方向は、逆時計まわり。	• B－54溝1暗灰色 • 胎土、焼成とも良好 • 受部に蓋の溶着が認められる。
	無蓋高杯	22	• 杯部、口縁部と体部の区画はなく、口縁部から体部へなだらかにつづく。 • 端部は丸くつくる。 • 脚部は非常に短く、先端は外方へやや拡がりぎみで丸くおさめる。	• 体、底部外面の2分の1篦削りし、内面及び他は横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる。	• B－139包含層 • 淡青灰色 • 胎土、焼成とも良好
		23・24	• 杯部はやや小型で浅く、口縁部は外上方へ開き、口縁部と底部の区画に凹線とそれに画された段がつく。また、その段に篦描きの斜線文を施こしたもの（24）もある。 • 脚部、円筒部は細長くしぼり、裾部は外下方へ大きく拡がる長脚2段透しである • 脚端部は、面をもつもの（23）と丸くおさめたもの（24）がある。	• 体、底部外面の2分の1篦削りした後、内面及び他ともに横ナデ調整。 • 一方向の仕上げナデがみられる（23） • 脚の円筒部内面にみられるしぼり目は顕著である。	• 23はB－67包含層一括遺物№1 • 暗灰色 • 胎土、焼成とも良好 • 24はB－67包含層一括遺物№2 • 淡灰色 • 胎土、焼成とも良好

器形		土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	甕A	25	• 口頸部は一旦外反してのち、段をつくって外上方へのびる。 • 端部は内面に、ゆるい段をもつ。 • 頸部と口縁部との区画には、わずかにつまみだした凸帯がめぐる。 • 口縁部外面には、4条のゆるやかな櫛描波状文が施されている。 • 体部はやや肩が張り、そこに一個の円孔が穿たれている。	• 口頸部と体部の接合部は、とてもていねいに仕上げられている。 • 体部内外面とも横ナデ中位下は、篦あて後、不定方行のナデ。 • 底部内面は指圧痕が、外面は一方行のナデ調整。	• A－26包含層 • 暗青灰色 • 胎土、焼成ともに良好
	甕B	26	• 底部は、いびつで平底ぎみである。 • 口頸部は大きく外上方に開き、端部でさらに段をつくってのびる。 • 端部は、丸くつくる。 • 体部は、あまり肩が張らず丸味をもつ。 • 体部中央に一個の円孔が穿たれている。 • 底部中央がやや凹んでいる。	• 口頸部及び体部中央まで横ナデ調整。 • 体部中央下は篦削りされている。 • 削りの方向は、逆時計まわり。 • 一切の装飾はみられない。	• A－23包含層 • 淡灰色 • 胎土、粗砂含む • 焼成　良好
	甕C	27	• 頸部は、やや細く、口頸部は大きく外上方に開く、端部はつまみだした凸帯がめぐりさらに開くと思われる。 • 口頸部には、凹線が2条づつ2段にめぐりその間に、細かい櫛描き波状文が2段と基頸部上に、細かいカキ目が施されている。 • 体部は丸く、肩部に2条、体部中央に一条の凹線がめぐり、その間に櫛描き列点文が施されている。又、そこに一個の円孔が穿たれている。	• 口頸部内面にしぼり目がみられる。 • 口頸部及び体部中央まで横ナデ調整。 • 体部中央下は、ていねいに篦削りされている • 削りの方向は、逆時計まわり。	• B－126土器溜め • 暗灰色 • 胎土、焼成とも良好
	甕D	28 • 29	• 頸部は、細く、口頸部はやや短く外上方に開く。 • 口頸部には、凹線が2条めぐり、他の装飾はみられない。 • 体部は、少し稜をもち肩が張る。そこに凹線が1～2条めぐる。 • 体部中央に一個の円孔が穿たれている。 • 底部は、丸味をもつもの（28）と平たいもの（29）がある。	• 口頸部内面にしぼり目がみられる。（29） • 口頸部及び体部中央まで横ナデ調整。 • 体部中央下は、粗く篦削りされている。 • 削りの方向は、逆時計まわり。	• 28はB－102井戸－2 • 淡青灰色 • 胎土、粗砂含む。 • 焼成、良好 • 29はB－102井戸－1 • 淡青灰色 • 胎土、焼成と良好
壺	台付壺	31 • 32	• 口頸部、脚部は欠損のため不明。 • やや内彎ぎみの肩部、肩部から体部へ丸くつづくもの（31）、やや角をもつもの（32）がある。	• 肩部及び内面は、横ナデ調整。 • 体部は、篦削り後横ナデ調整。	• 31は、B－67井戸－1 16.1 • 青灰色

器形	土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付壺	31・32	• 肩部と体部の境界に、凹線1～2条、体部、上部にも1条めぐらし、その間に櫛描き列点文を施す。 • 底部は丸く、細い脚部がつく、脚部には三方の透しが認められる。	• 削りの方向は、逆時計まわり。	• 胎土、焼成とも良好 • 32は、B－67井戸－1上層 • 暗灰色 • 胎土、焼成とも良好 • 自然釉の付着が、著しい。
壺A	30	• 口頸部は欠損のため不明。 • 最大腹径は、体部中央にある丸い器体を呈す。 • 肩部と体部の境界に、凹線2条が2段めぐり、その下に櫛描き列点文が施されている。 • 体部中央に粗いカキ目。 • 底部は、やや丸い。	• 肩部及び内面は、横ナデ調整。 • 体部中央下は、篦削り • 底部は、篦削り後横ナデ調整。 • 削りの方向は、時計まわり。	• B－67井戸－1 1/4 4 • 暗灰色 • 胎土、焼成とも良好
壺B	33	• 口頸部は、欠損のため不明。 • やや肩の張る、いびつな丸い器体を呈す。 • 肩部と体部下半にカキ目が行なわれている。 • 底部は、やや丸味をもつ。	• 肩、体部及び内面は横ナデ調整。 • 体部下半外面は、篦削り。 • 削りの方向は、時計まわり。	• B－67井戸－1 1/4 3 • 灰褐色 • 胎土、良 • 焼成、良、やや生焼けか。
壺C	34・35	• 短く外上方へ開く口頸。 • 口端部は、外側に肥厚し沈線を一条めぐらすもの（34）もある。 • 頸部にはカキ目後横ナデを行なう。 • 体部は、球形のもの（34）とやや肩の張るもの（35）がある。 • 体部中央にカキ目を行なう。 • 底部は、丸味をもつ。	• 肩、体部及び内面は横ナデ調整。 • 体部下半外面は、篦削り。 • 削りの方向は、時計まわり。	• B－102井戸－2 • 淡灰色 • 胎土、焼成とも良好
直口壺	36	• 外上方にほぼまっすぐのびる口頸。端部は丸い。 • 口頸部中央よりカキ目を行う。 • やや肩の張る器体を呈し、肩部より体部中央下までカキ目を行う。 • 底部は、平たい。	• 端部及び内面は、横ナデ調整。 • 体部中央下外面に、格子目ふうの叩き目が、みられる。 • 体部下半外面は篦削り。 • 削りの方向は、逆時計まわり。	• B－102井戸－2 • 淡灰白色 • 胎土、焼成とも良好
広口壺	37	• 口頸部は広く、短く外上方へ開く。端部は、欠損のため不明。 • 短く張った肩から屈曲し体部へつづく。 • 底部外周のわずか内側から、やや外方へ	• 口頸、肩部及び内面は横ナデ調整。 • 体部外面は、縦横の軽い篦削りの後横ナデ調	• C－142井戸－3 • 淡灰色 • 胎土、焼成と

器形		土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
	広口壺	37	ふんばった短い高台がつく。	整。 • 底部は、篦削り、削りの方向は、逆時計まわり。	も良好
平瓶	平瓶	38	• 口縁部は、やや内彎ぎみにのび、体部上面の中心から外して接合する。 • 体部上面は、丸味をもちふくらみ、器体は丸味をもつ。 • 体部中央にカキ目後、横ナデ調整。 • 底部は平たい。ラセン状にカキ目調整する。 • 体部上面には、小さな粘土粒を2個貼付している。	• 口頸部及び体部上面、内面は、横ナデ調整。 • 体部下半外面は篦削り • 削りの方向は、逆時計まわり	• B－67包含層一括遺物 No.3 • 淡灰色 • 胎土、焼成とも良好
甕	甕A	39	• 外反する口縁部。 • 文様は、にぶい凸帯と櫛描き波状文の組合せである。	• 入念な横ナデ調整。	• B－102包含層 • 暗灰色 • 胎土、焼成ともに良好 • 断面は赤紫色
	甕B	40	• 口頸は短く、やや立ちあがり外反する。 • 口端部は下へ折りまげて、上端は稜をなし、下端部はやや垂下し、丸くつくる。	• 口頸部外面は、格子目ふう叩き目文後、内面ともに横ナデ調整。 • 肩部外面は、格子目ふう叩き目文、内面は同心円文。	• C－142 井戸－3 • 青灰色 • 胎土、やや粗砂含む • 焼成　良好
提瓶	提瓶A	41	• 口頸部は、内彎ぎみに短く外反し、端部は段をなす。 • 体部の前面は丸くふくれ、背面は丸味をもち、平らな部分は少ない。 • 肩の両側には、環状を偏平にした耳がついている。	• 口頸部は内外面とも横ナデ。 • 体部前面は、細かいカキ目後、横ナデ調整。 • 体部背面は、篦削り後カキ目を2回くり返し行なう。	• B－67包含層一括遺物 No.4 • 淡青灰色 • 胎土　やや粗砂含む • 焼成　良好
	提瓶B	42	• 口頸部は、短く外反する。端部は欠損のため不明。 • 体部の前面は、丸味をもち、なだらかで背面は丸味をもちながらも平らである。 • 肩の両側には、小さく退化した耳がついている。	• 口頸部は内外面とも横ナデ調整。 • 体部前面は、やや粗いカキ目後、横ナデ調整 • 前面中心部に、「X」に粗いカキ目を施している。 • 体部背面は、篦削り後カキ目を行なう。	• B－67井戸－1 No.5 • 淡青灰色 • 胎土、焼成とも良好
甕	甕	43	• 口頸部は、短く外反し、端部は外側に折り返し肥厚する。 • 最大腹径は、体部中位にあり、偏球形を呈す器体をもつ。 • 底部は丸底。	• 口頸部の内外面は、横ナデ調整。 • 体部外面は、格子目ふう叩き目文後、細かいカキ目調整。	• B－67井戸－1 No.7 • 淡黄灰色 • 胎土、焼成とも良好

器形		土器番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	甕	43		• 体部内面は、同心円文がつく。	• 体部外面にススの付着が著しい。
横瓶	横瓶	44	• 口頸部は、ほぼまっすぐ上方にのび、端部は丸くつくる。 • 体部は俵を横倒しした形である。	• 口頸部の内外面は横ナデ調整。 • 体部外面は、格子目ふうの叩き目文後、粗いカキ目調整。 • 体部内面は、同心円文がつく。 • 体部長辺の両端は、当板を少しづつずらして成形したのか、同心円文が乱れ凹凸が激しい	• B－67井戸－1№8 • 淡黄灰色 • 胎土、焼成とも良好

2. 包含層の土器

包含層より出土した土器は、その多くが小片で且つ、資料が膨大で、全てを把握しきれないので、ここではその中より、より良好な資料のみを抽出し述べる事にする。

包含層からは、土師器と須恵器が混在して出土しており、その中心は須恵器が圧倒的多数を占めている。須恵器は、杯（10・11）、杯蓋（13・14・15・16）、高杯（19・22・23・24）、甕（25・26・27）、平瓶(41)甕（39）がみられ、5世紀中葉から7世紀前半のもので、6世紀末から7世紀前半のものが最も多い。

全般的に新しい様相をもつなかで、甕（25）は、非常に古い要素を含んでいると思われる。口縁部外面に施された櫛描き波状文は、大阪府大東市、堂山古墳[②]出土の有蓋高杯のそれと酷似し、胴の張り及び胴下半の不定方向のナデなど、初期須恵器の範疇に属するであろう。

土師器は、蓋（4）、鉢（5）、壺（7）、甕（8）があり、異形のものは、杓子型土製品（3）のみである。鉢、壺、甕、は比較的時期の新しいものと思われる。

3. 井戸の土器

井戸－1出土土器は、須恵器、壺（30・33）、台付壺（31・32）、提瓶（42）、横瓶（44）、甕（43）、土師器甕（6）、である。
いずれも6世紀末から7世紀前半と思われる。

井戸－2出土土器は、須恵器、壺（34・35・36）、甕（28・29）で、上層には甕が、下層には壺がありほとんど時期はなく、7世紀前半であろう。

井戸－3出土土器は、須恵器、広口壺（37）、甕（40）、瓶子（図－10）である。瓶子は、口縁部はわずかに外上方にひらき、体部は丸くふくらみ、体部中位下よりかるく箆削りされ、底部外周より、しっかりした高台がつき底部には、箆で「大」が描かれている。これらは、他の井戸に比べて、一番新しく、8～9世紀と思われる。

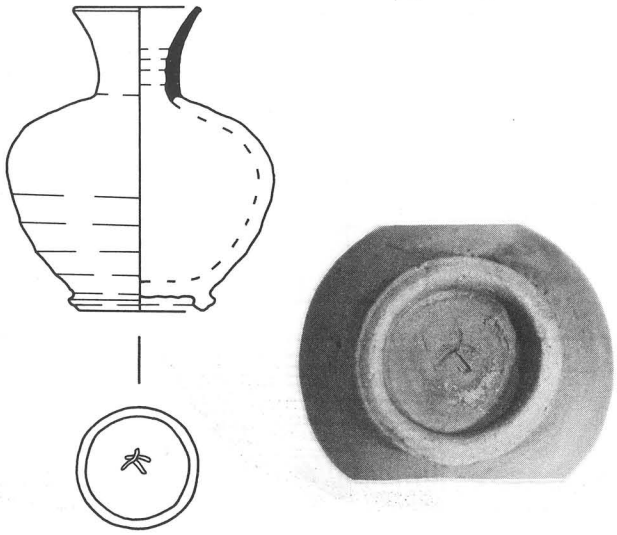
先にも述べたが、包含層及び井戸、その他遺構出土の土器が、あまりにも膨大なので、あくまでも特徴的なものだけを取り上げただけなので、今度、さらに修正、検討を続けてゆきたい。

（大野 恵三子）

① 須恵器観察表及び各部分の名称、年代観は、田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年 を参照させていただいた。

② 『堂山古墳群発掘調査概要』 大阪府教育委員会 1973年

図―9



4. その他の遺物

図―10 1. 出土地はB―67包含層 サヌカイト製打製石剣の破片であろう。

図―10 2. 出土地はB―54包含層 土師質の紡錘車で焼成・胎土は良で、色調は乳褐色である。

図―10 3. 出土地はA―22包含層 須恵質の紡錘車で焼成・胎土は良好で、色調は灰青色である。

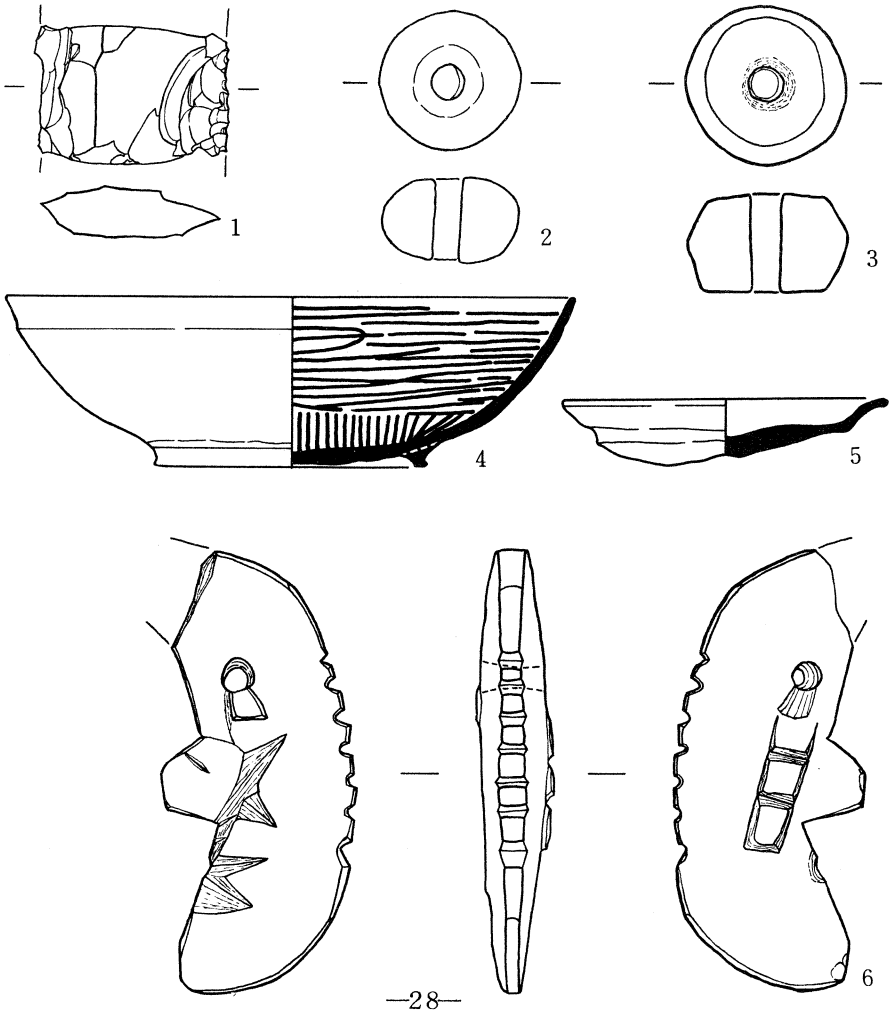
図－10　4. 出土地はB－78包含層　土師質の椀で内面はヘラみがきで暗文状に残っている。その暗文の付けかたは上部は回転状に下部はジグザグ状に施している。外面は上部8㎜まで横ナデで、それより下部はヘラケズリ後横ナデをしている。底部はハリ付高台の後横ナデを施している。焼成・胎土は良好で、色調は内面が黒色で外面淡茶褐色である。

図－10　5. 出土地はC－142　井戸－3出土　土師質の手づくね小皿である。底部のみ手づくねで他は横ナデである。焼成・胎土は良好、色調は乳白色である。

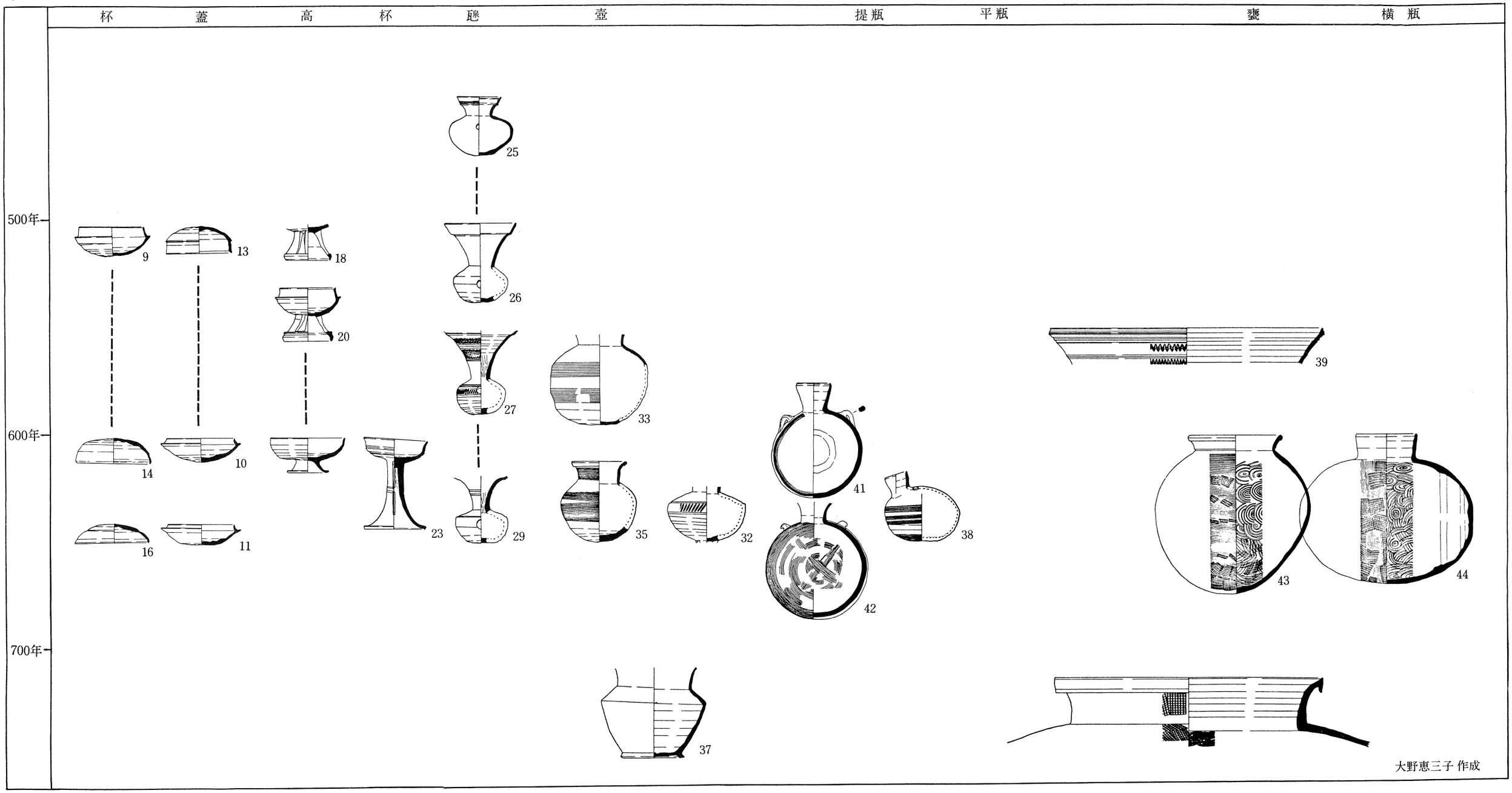
図－6　6. 出土地はA－20包含層　滑石製の子持勾玉である。

（白井忠雄）

図－10



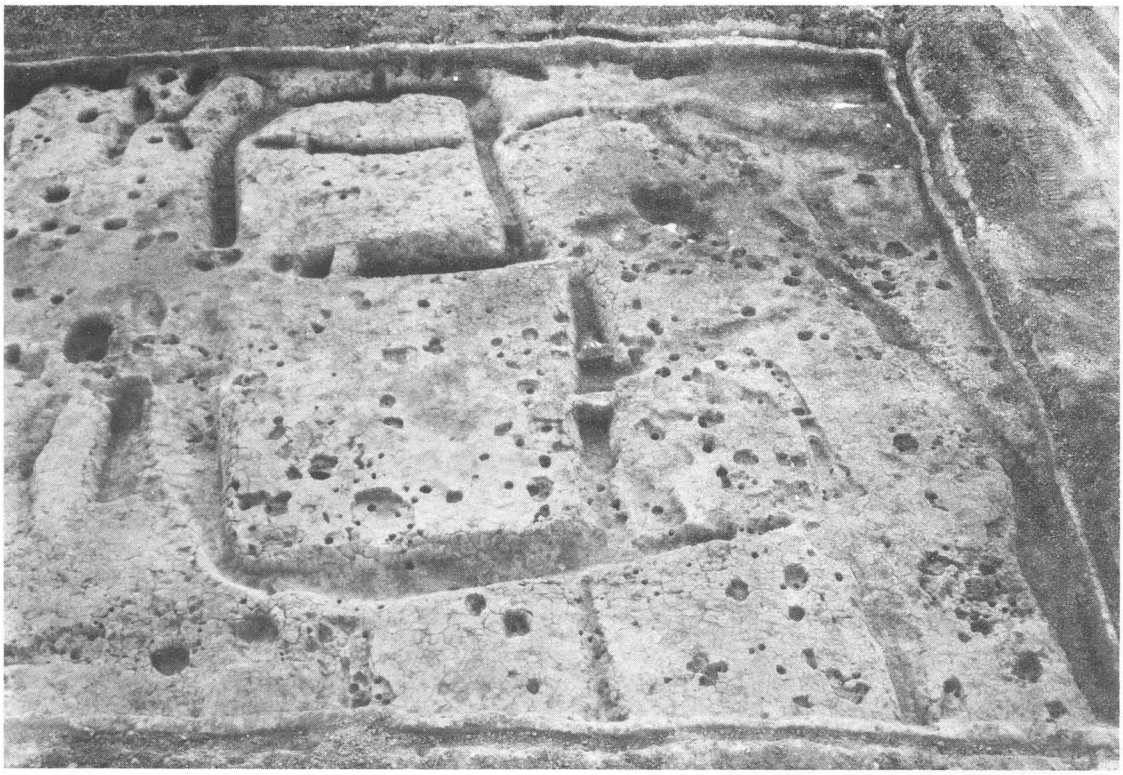
須恵器相対表(KH地区)－1977年－



大野恵三子 作成

夏の発掘風景

図版1



KH　A地区・方形周溝墓群　東から

KH　A地区・ピット群　東から

図版 2

KH　B地区・井戸－1　南から

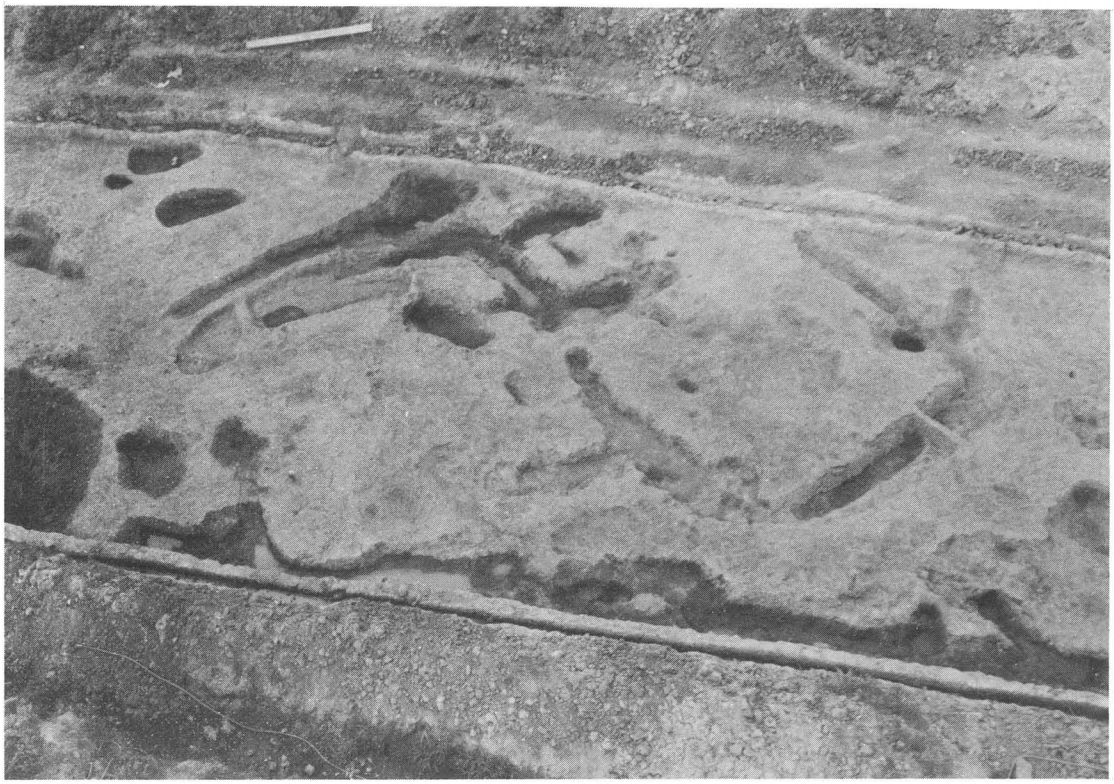
KH　B地区・井戸－1　西から

図版 3

KH　B地区・方形周溝墓－1・全景　南から

KH　B地区・井戸－2　東から

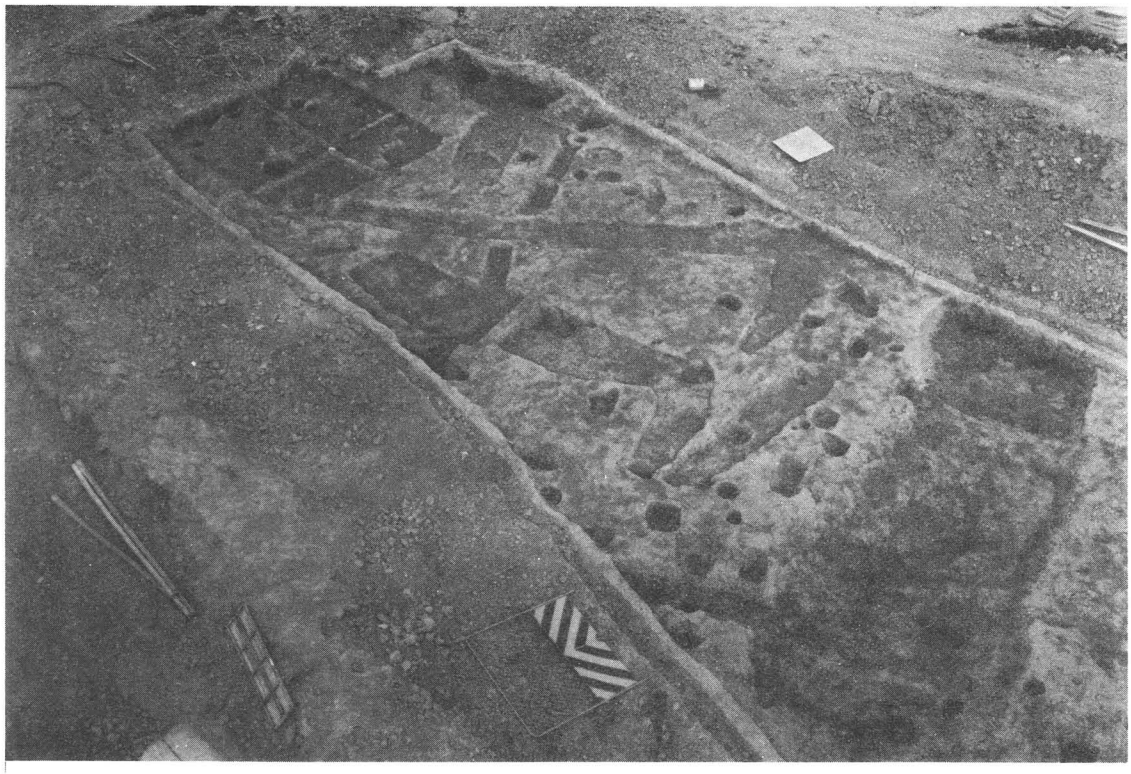
図版 4



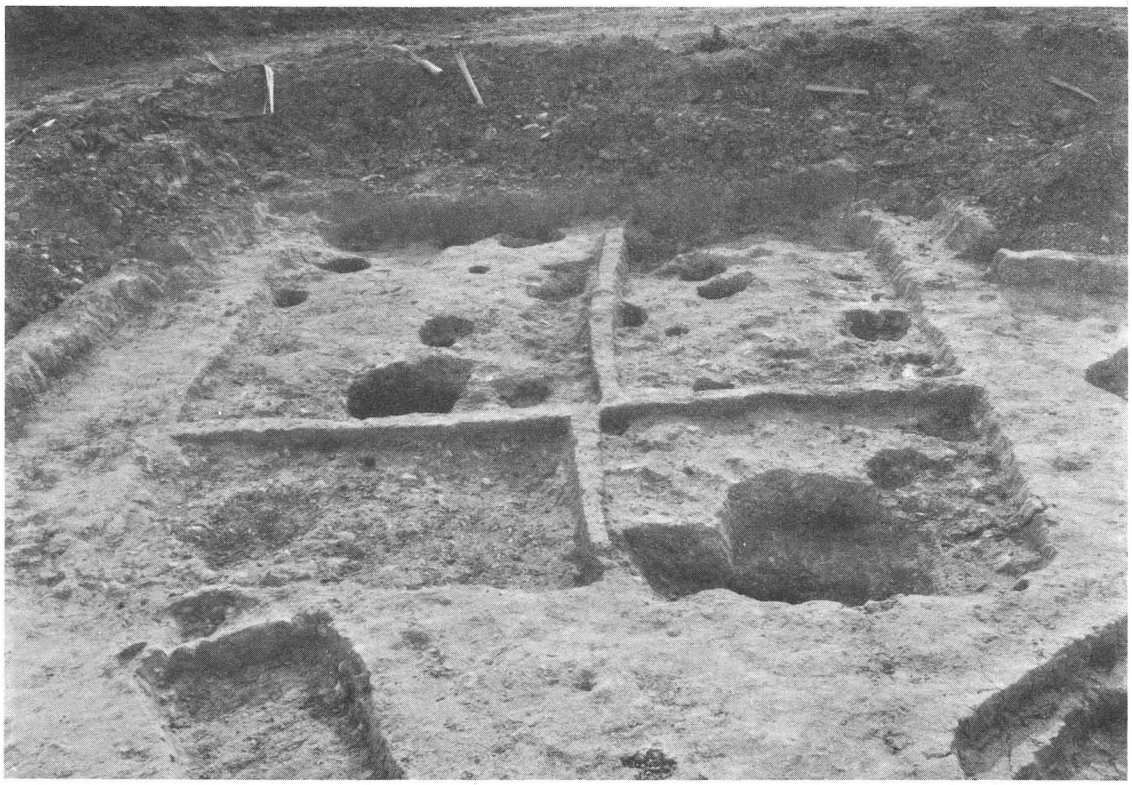
KH　B地区方形周溝墓－2・4 南から

KH　B地区・方形周溝墓－2・3　南から

図版5



KH　C地区　南から



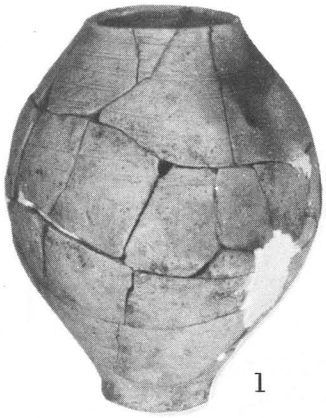
KH　C地区・住居址－1　東から

図版 6

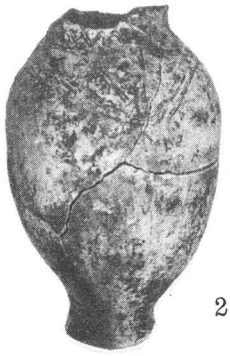
KH　C地区　南から

KH　C地区・井戸－3　北から

図版 7



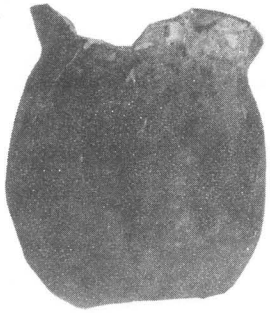
1



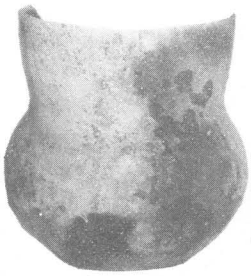
2

3

5



6



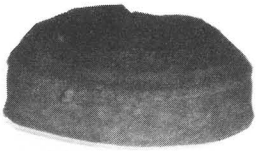
7

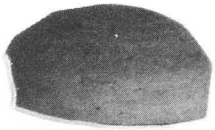
8

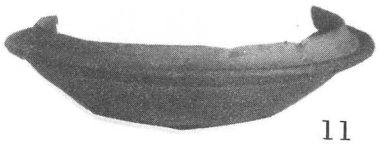
4

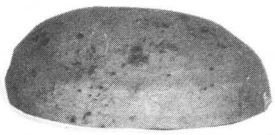
図版 8

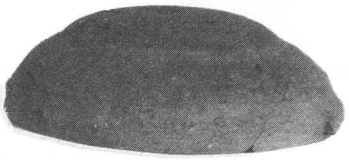
10


12


17


11

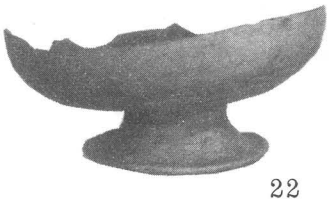

15


16

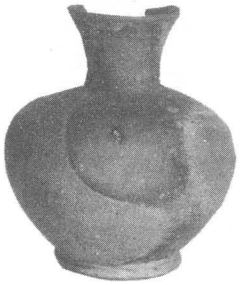
19

18

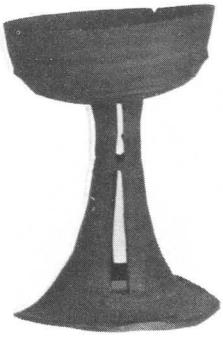
20


22

21

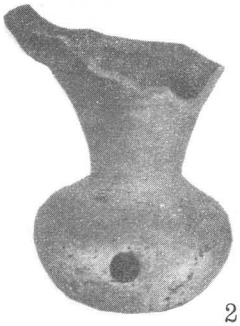


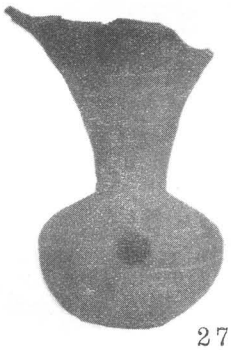
23


24

図版9

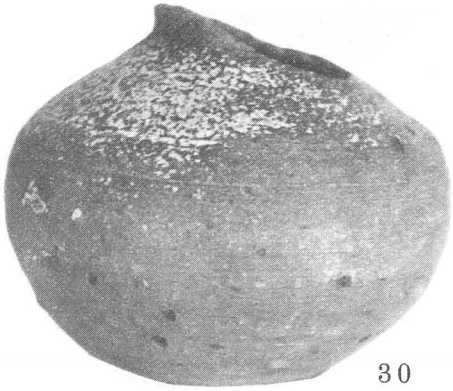
25


26


27

28

29


30

31

32

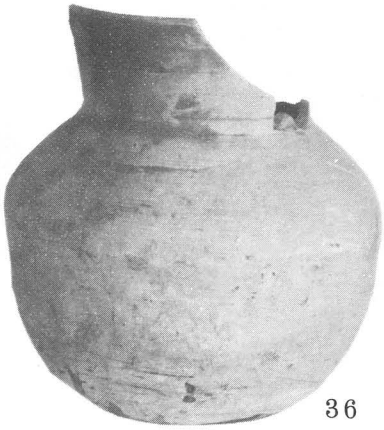
図版１０

38

33

34

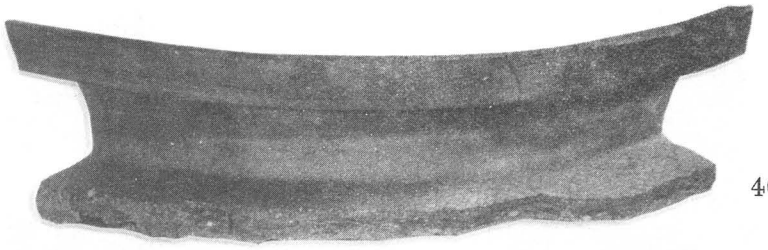
35



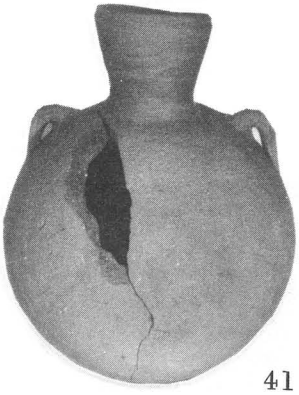
36

37

図版１１

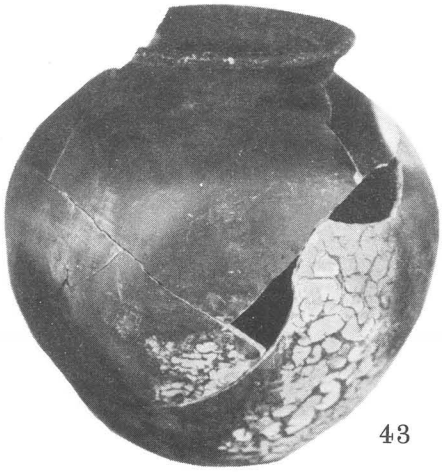


40



41

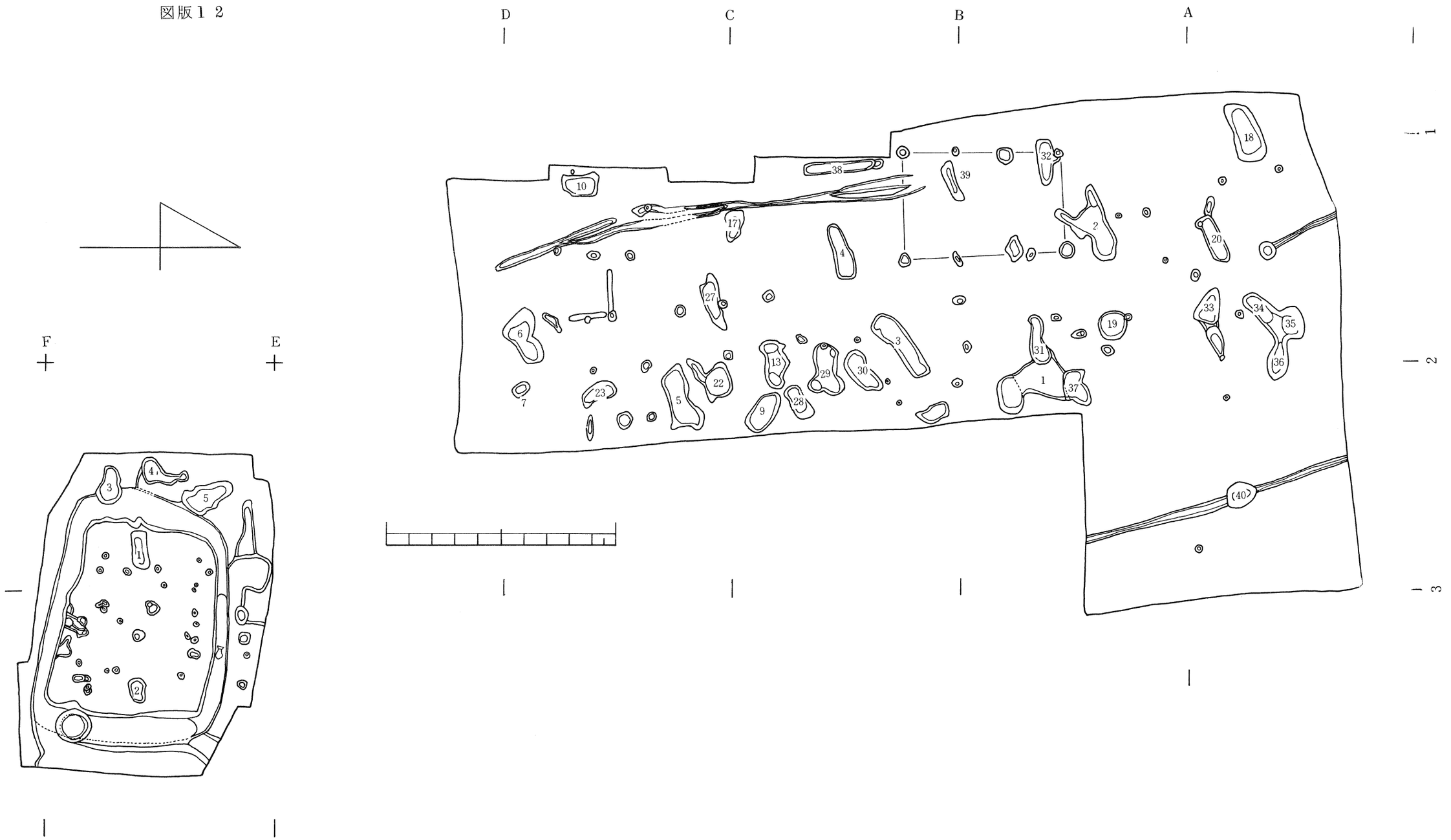
42



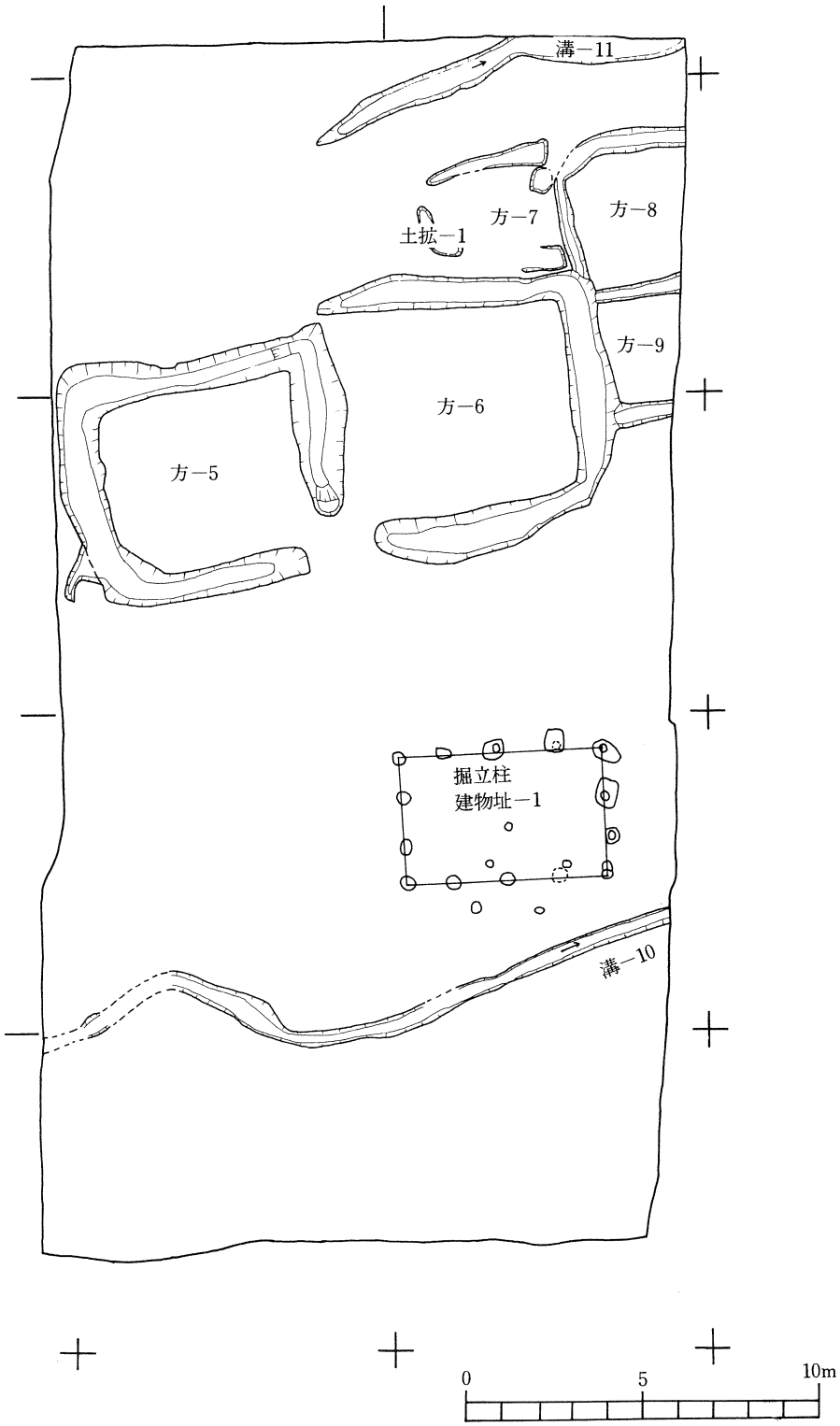
43

44

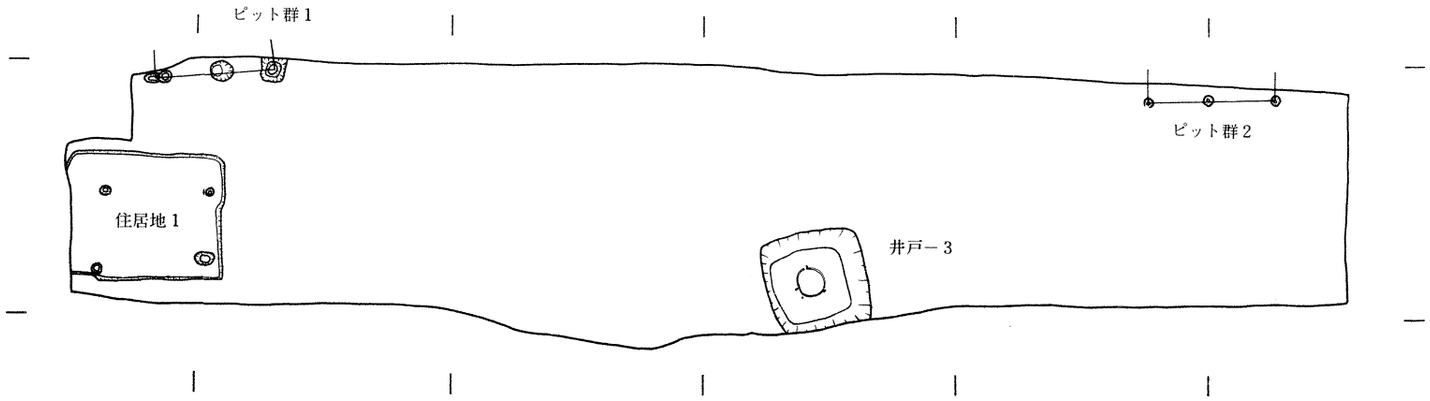
図版１２


D
C
B
A
F
E
1
2
3
10
38
39
32
18
17
4
2
20
27
6
3
19
33
34
35
31
13
29
30
36
1
37
7
23
22
5
9
28
(40)
3
4
5
1
2

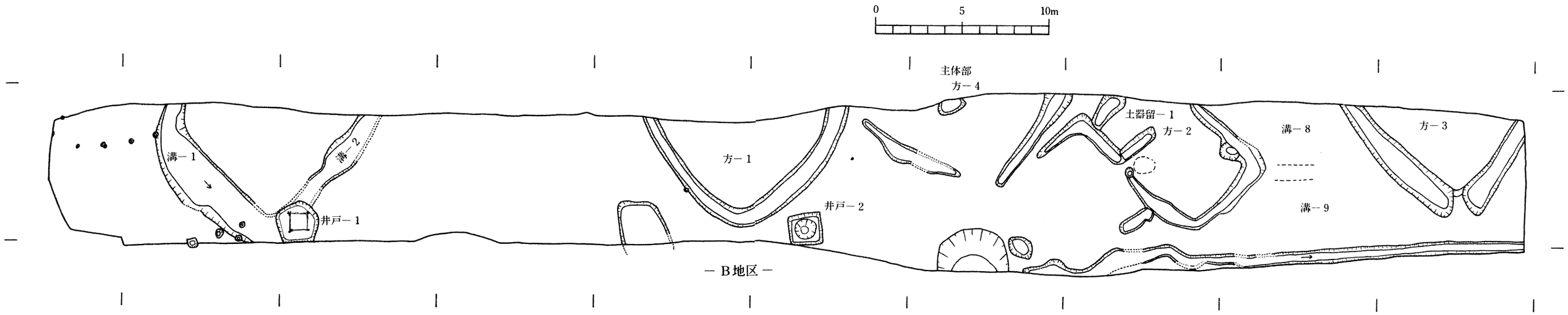
図版１３



図版１４

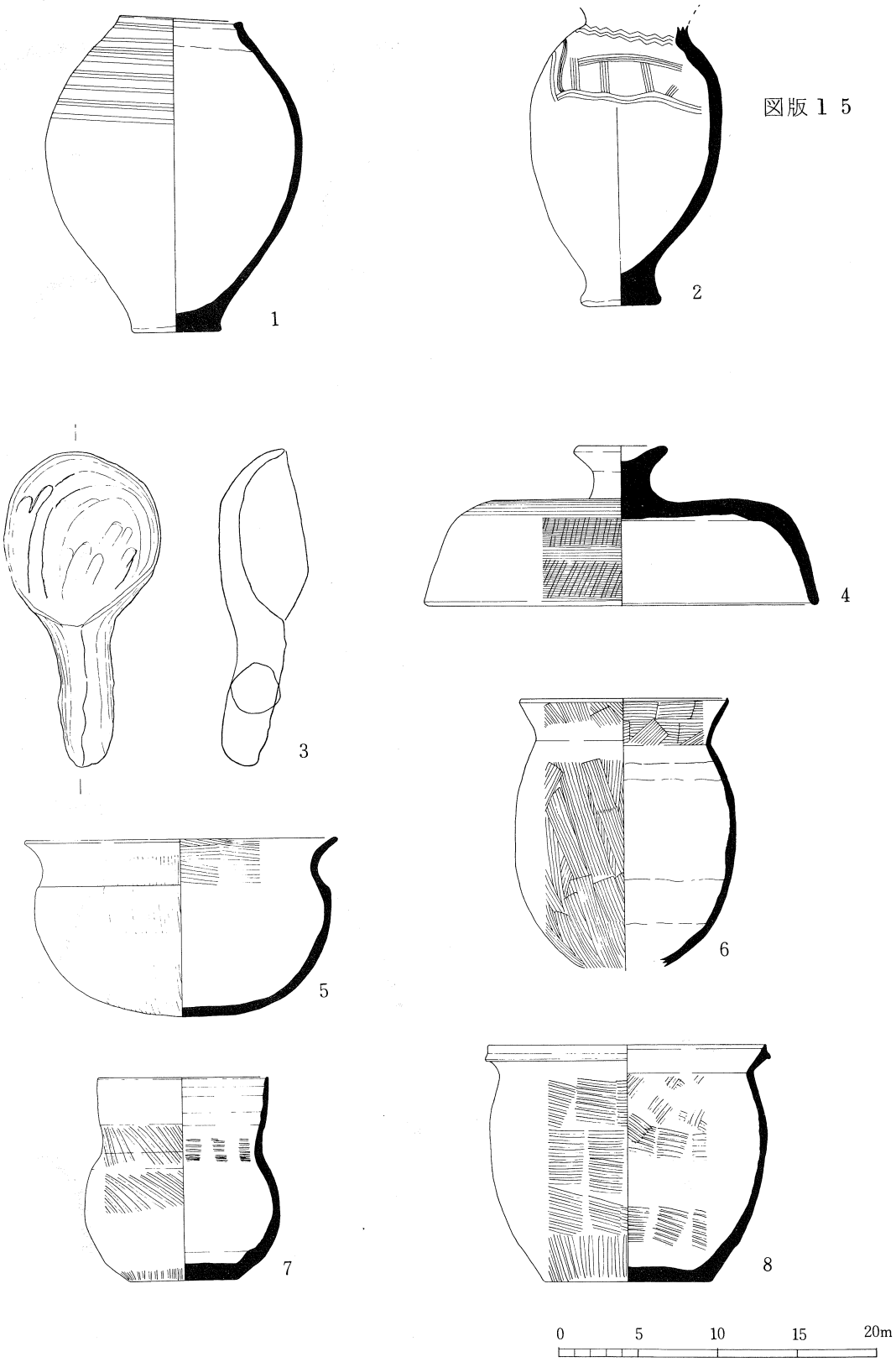

ピット群１
ピット群２
住居地１
井戸－３

－Ｃ地区－

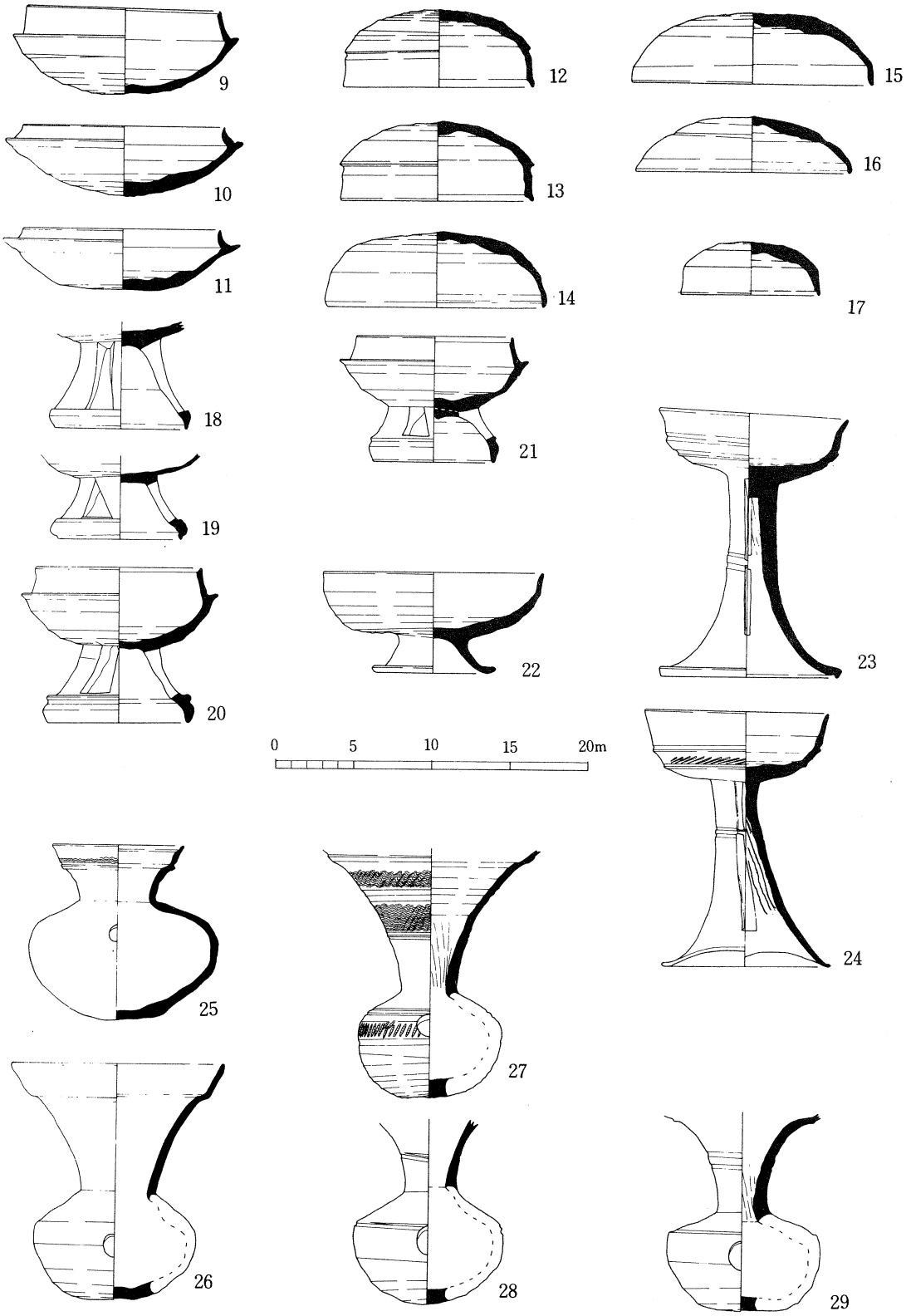

0
5
10m
主体部
方－４
土器留－１
方－２
溝－８
方－３
溝－１
溝－２
方－１
井戸－２
溝－９
井戸－１

－Ｂ地区－

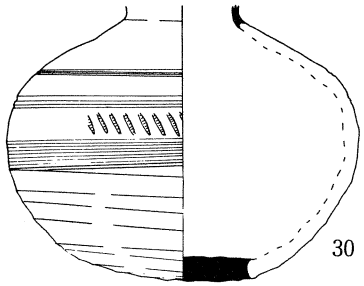
図版１５

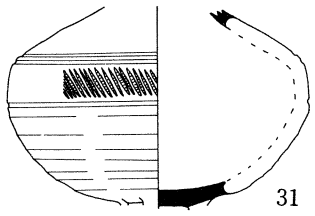


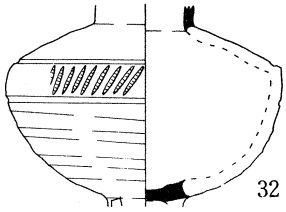
図版１６

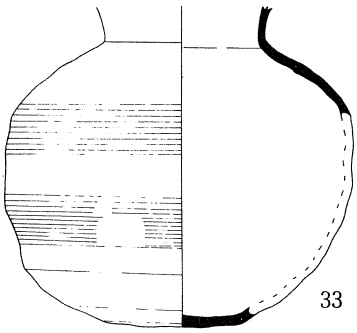

9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
5
10
15
20m

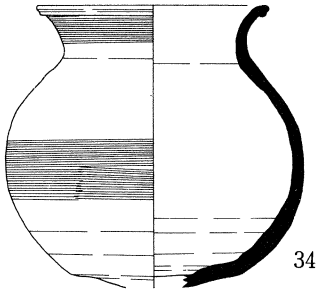
図版１７

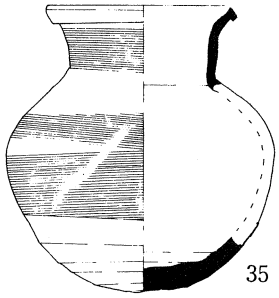

30

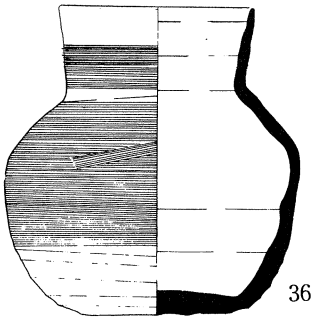

31

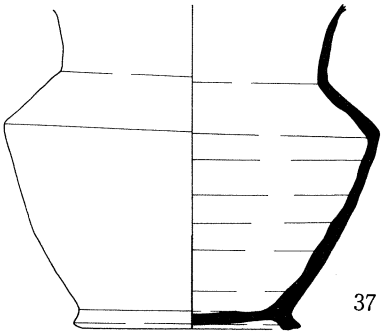

32

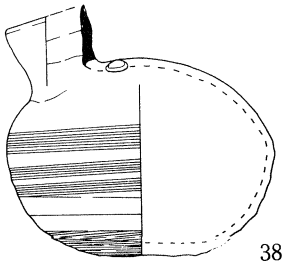

33

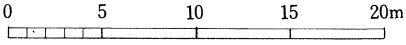

34

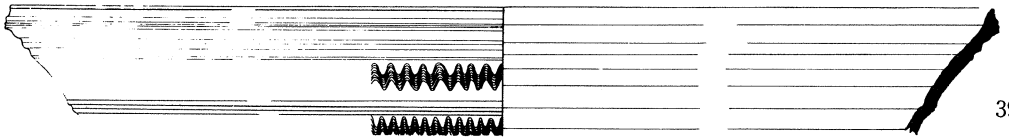

35

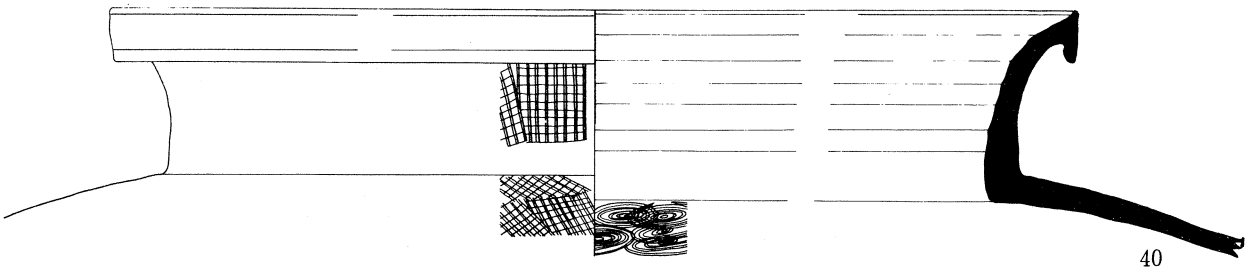

36


37

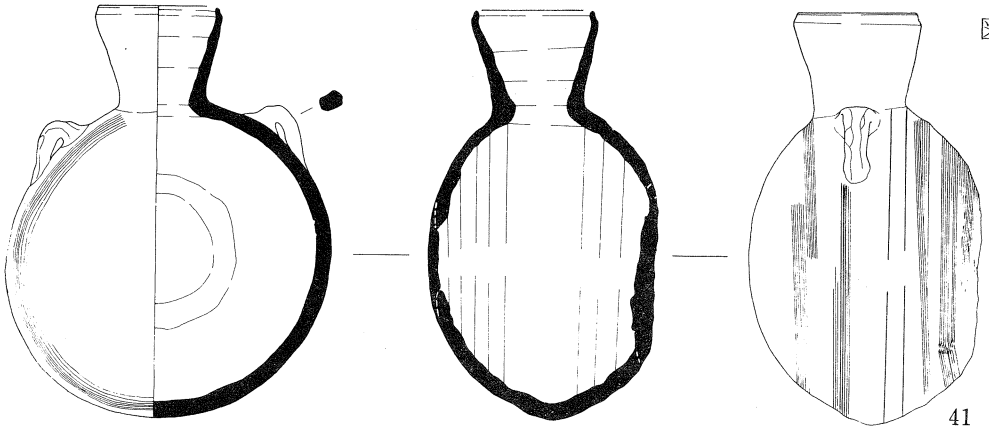

38

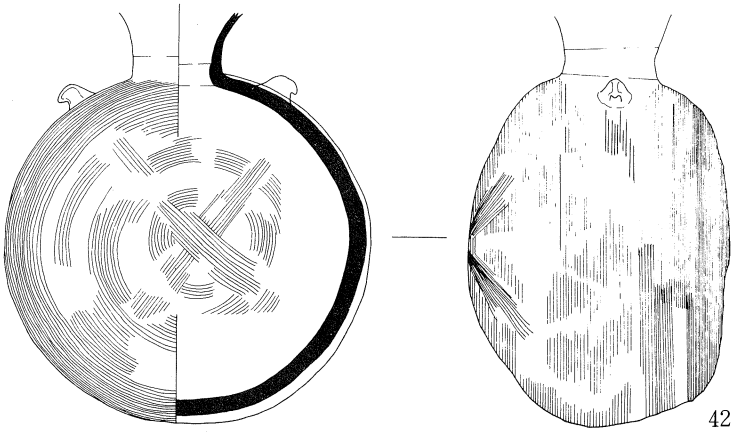
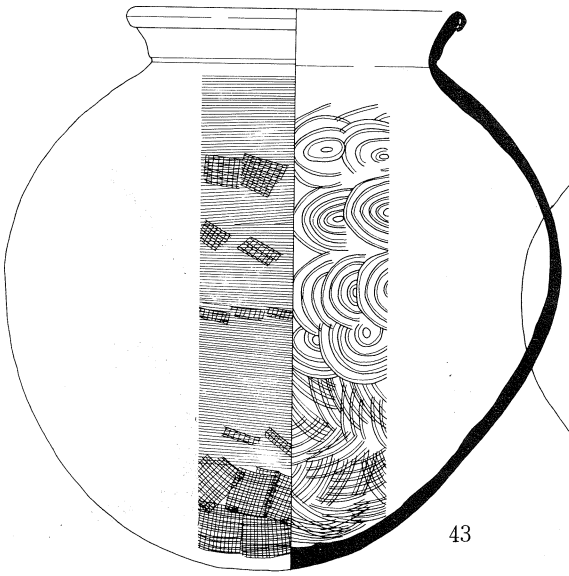
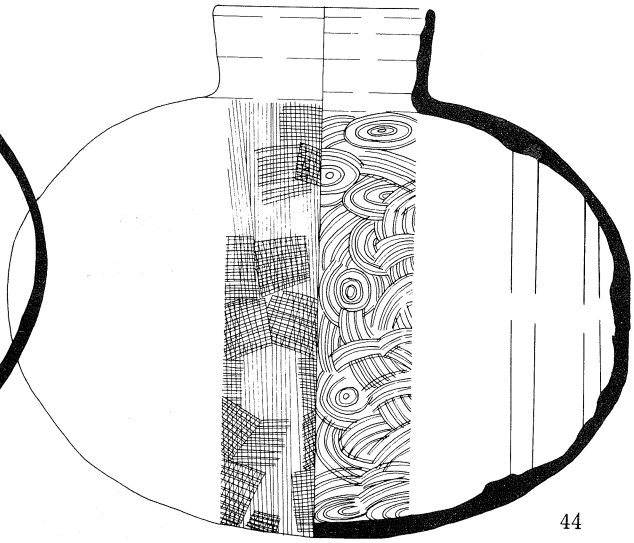



39


40

図版１８





0 5 10 15 20m